

書評編集委員会

1989.4.3
第87号

書評

読書案内 連載
寄稿 短評



読書案内

あいさつ	岡 徹 (法学部教員)	4
自己の基本的な姿勢からの批判	市原 靖久 (法学部教員)	6
影の学問、窓の学問	西川 和男 (文学部教員)	8
「辞書」の新発見	和田 葉子 (文学部教員)	10
無意識の伝達	石田 浩 (経済学部教員)	12
よみかたことはじめ	李 英和 (経済学部教員)	14
私の読書法	木田 和雄 (商学部教員)	16
韓国(本)ブームにおける「きわどさ」「 ラス・カサス著 染田秀藤訳 『インディアスの破壊について』の簡潔な報告	杉野 幹夫 (商学部教員)	18
社会的問題関心を深めるために	大西 正曹 (社会学部教員)	20
アジアの考察と外国人労働者	多喜 弘次 (社会学部教員)	22
ビートルズの時計	引原 隆士 (工学部教員)	24
「意見の確立のために」	山本 登 (工学部教員)	26
まわりに目を向けよう		28

寄稿

内藤湖南の朝鮮統治論―併合へむけて―……………西重信 30

連載

研究余滴 ウエルレーヌ12

どん底の中で『愛』を(I)……………山村嘉巳 36

日本中国ことばの来往(ゆきまき)(32)……………芝田稔 46

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノートⅢ

懺悔と抑圧……………梁永厚 52

羅針盤……………2

短評……………60

バックナンバー一覧……………62

お知らせ……………63

編集後記……………64

1989.3 羅針盤



新入生の皆さん、入学おめでとう。受身的で無味乾燥の日々に終止符を打ち意気揚々の皆さんに、私達「書評」編集委員会よりメッセージを送ります。

ちようど皆さんが受験勉強のラストスパートに入っていたのであろう頃、「天皇制賛美キャンペーン」が政府・マスコミが一体化した形で、私達の周りを吹き荒れました。「自粛」なる奇妙な「流行語(?)」を生み、全国に記帳所が自治体をも動員して設置され、新聞・テレビには皇居に向かって「平癒祈願」する人々が連日の如く報道されました。それらは、ヒロヒトの死Ⅱ「Xデー」や「大喪」等の中で更に強化されて来ています。

恐らくは国家・資本は侵略の歴史や天皇ヒロヒトの戦争責任などの「厄介な」事実を正に美化―抹殺する事で、明らかに新たな形で推進されている差別・侵略体制を強化し、その為の民衆統合軸として天皇制を全面化させようとしているのでしょう。首相竹下の「侵略戦争ではなかった」なる暴言の狙いも、その様な意図から導き出されたものだと思います。

が、彼等の意図に「反して」、世界各国の「天皇騒ぎの日本」を視る眼は非常に厳しいものがあります。確かに「弔問外交」などと称し、国家・資本レヴェルでは「円の強さ」「経済援助」等の日本の横顔を意識した姿が「大

喪」時にはタレ流されましたが、「戦前・戦後」一貫して日本に踏み付けにされている大多数の民衆は「NO!」の声を返して来ています。直接的な日帝侵略の場となったアジア諸国は勿論、欧米等からも根強い「天皇ヒロヒト批判」が巻き起こっている事実私達は渦中にいる者達として向き合わねばなりません。そして、「天皇制賛美」の嵐の中で、過去天皇制によって何が行われてきたかということと同時に、現在何が意図されているかをも射程に入れた視座を獲得する必要があります。

付言するならば、先述の竹下発言や以前物議をかもした藤尾・奥野・渡辺発言にしても、勿論徹底批判・糾弾されねばならないのですが、彼等の特異な突出した者達として第三者的に捉える事が最も危険であると思うのです。実際、この間の「天皇制賛美—Xデー情況」下で「反天皇制」の動きに対しては言わずもがな、少しでも現状や体制に異を唱える者には徹底的な弾圧が加えられています。その中で、あの「自粛」なる異様な情況が正当化され、個々の民衆の結合は分断されてゆく事によって、いわば「内なる天皇制」というか、異質な物象を全て排除し支配体制に従順な思考を身に付けさせられるのです。

それらを断固拒否する事は、口で言う程容易では有りませんが、国内外の天皇制批判・ヒロヒト糾弾の声を「野

次”ぐらいにしか受け止められない感覚と意識だけは皆さんに絶対持つて欲しくありません。

かく言う私も、つい最近までは教科書の内容を絶対化し、「天皇制」とかあるいはそれに関連して「国際化」が全面化する時代風潮を疑ったりした事ありませんでした。「歴史」の授業や参考書には「天皇ヒロヒトの戦争責任」とか「日帝の侵略史」などは不問に付されたり、美化されていましたが、その時は受験知識の一単語としてしか「歴史」を捉えられなかったのです。

今、私はそれを非常に悔しく思います。そして遅まきながらその誤ちに気付きつつある自分を対象化する事とともに、恐らく「天皇制」や「日帝侵略史」等について再考する機会と時間を奪われていた皆さんにも是非これらの事から現在の日本を問い対象化することを始めて欲しいのです。その事を抜きにした「国際化」などは、自分達がより「豊か」に肥え太る為に、一層「国際的に侵略していく」ための美辞麗句に過ぎませんし、在日外国人を含めた全ての人々と結び合い共に生きるなどという事は「絵に描いた餅」以下でしょう。

ともかくも皆さんは、幾らかの時間的余裕を手にしたわけです。押し付けられた知識を脱ぎ捨て、私達と共にこれらの問題を含め主体的思考を始めていきましょう!



読書への誘い

読書というと、すぐ読書「感想文」が浮かんでくる人が多いかもしれません。これは、今まで学校の中で、感想文を書くために読んでいたからでしょう。しかし、感想―意見というのは、読んだ後に浮かんでくるものです。感想文を意識しながら読んでいては、読書を楽しめないと思うのです
が……。

「感想文」という誰かに求められた意見を考えるためにではなくて、今、現実にある社会を、ものを自分なりに正確に見るために本を読んでみませんか。よく、「新書本を読むけれど、あれは著者の意見を読者におしつけようとしている本だから、嫌いだ。」と言う人もいますが、それなら、その著者の意見に対して、自分の言葉で意見を言ってみるのです。もしかすると、自分の言葉を見つけれないまま、本に左右されてしまうかもしれませんが、本の意見に賛成するにしても、反対するにしてもどんなふうに賛成、反対するのが考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

読 書 案 内

岡 徹 …………… 6 (法学部教員)	木田 和雄 …………… 18 (商学部教員)
市原 靖久 …………… 8 (法学部教員)	杉野 幹夫 …………… 20 (商学部教員)
西川 和男 …………… 10 (文学部教員)	大西 正曹 …………… 22 (社会学部教員)
和田 葉子 …………… 12 (文学部教員)	多喜 弘次 …………… 24 (社会学部教員)
石田 浩 …………… 14 (経済学部教員)	引原 隆士 …………… 26 (工学部教員)
李 英和 …………… 16 (経済学部教員)	山本 登 …………… 28 (工学部教員)

また別の人は、「本屋にはよく行くけれども、
 新刊、雑誌の場所しか行ったことがない。」と言
 うでしょう。しかし、本屋には、それだけではあ
 りません。今まで、自分が足を踏み入れなかつた
 本に出会い、そこから、新しいものが見えてくる
 かもしれないのです。「歴史」で学んだように、
 過去を現在の視点からとらえるのではなく、自分
 の生きている歴史—同時代のことについて、自分
 なりに意見をもてるようになるために、読書を始
 めてみましょう。

いえ、最初からそんなに意気込んで読まずに、
 多種多様に本に触れて下さい。雑誌から、マンガ、
 小説、身近なところから読み、そこから、なぜ今
 こんな特集が一般受けするのか、なぜこの本が売
 れるのか、そうしたら、いつかふと考えた時、社
 会の矛盾が、自分のことが見えてくるかもしれま
 せん。

ここに、「読書案内」として先生方に、読書に
 ついて語っていただいています。参考になると思
 うところは、どんどん吸収し、大いに読書をして
 下さい。本を通して、皆さんと共に、成長してい
 きましょう。

自己の基本的姿勢からの 批判

岡 徹

(おか とおる・法学部教員。専攻はローマ法および西洋法制史)

私が若かった頃、柴田翔「されど、われらが日々——」が芥川賞をうけた。「ロクタル管の話」と合わせて一冊本で出版された版はかなりの数の読者を獲得した。この書物の愛読者であった友人が、「文学」という課目の学年末試験で「されどわれらが日々——」と某作家のある作品とを比較して論ずるということになった(ちなみに、この某作家とは誰かを考えてみるのも興味深いのではないかと思う)。この友人は、授業には全く出ずエレキ・ギターに熱中していたので、担当教授の考えなどつ

ゆ知らず、「されど……」を絶賛する答案を書き「不可」となった。青春を楽しんでいたその友人は成績には無関心であったが、「不可」について「そういうものかなあ」と、いぶかしげであった。友人が「不可」であったのは、彼の答案がデタラメであったからかもしれないが、担当教授が柴田翔を批判する授業をしたというこのことは事実であり、「されど……」を支持していた人とは考えの根本が全く異なっていたということに疑いはない。

書物というものは、読者の個人の

考えによって選択される運命をになつている。その選択ということの問題としなければならない。選択に際しての各人の根本的姿勢が問題である。どのような書物を好むかということは、この姿勢が問われているということである。したがって万人に共通して愛好される書物などというものはありえない。つまり、著者の側は批判者を待っている。批判者の登場を覚悟あるいは期待している。批判者を批判することによって著者もまた上昇する可能性を与えられる。カエサル「ガッリア戦記」に次の一節がある(国原吉之助訳・築摩書房。岩波文庫もある)。「どんな人でも、一定の畑なり固有の所有地なりを持つていない。各地区や各郷の指導者が、一年ごとに、一緒に暮らしている民族や親戚の集団にたいし、適当と認めた広さと場所を指定し、土地を分け与え、次の年には、また

別な土地へと移ることを強制するの
である。そのわけを指導者はいろい
ろと説明する。……要するに、党派
や葛藤を生み出す根源の金銭欲が芽
ばえるからだという。……」

もし、何らかの機会に右の一節を
知るに至ったとする。そこで同時代
のゲルマン人の社会体制について書
いた別の書物がないかと興味をもつ
に至ったならば、タキトゥス「ゲル
マーニア」(泉井久之助訳・岩波文
庫)の存在を知ることとなるであろ
う。そこには次の一節が見出される。

「小事には首長たちが、大事には(部
族の)部民全体が審議に掌わる。」

この二つの文章からゲルマン人は
経済的に平等で、政治的には民主的
な社会に生きていたと考える人もい
るかもしれない。そのように考えな
い人もいるかもしれない。ここで考
えを打ち切らずに、さらに書物をさ
がし求める人もいるであろう。さが

し求めるならば日本語で書かれた関
連書だけでも何冊も見つけることが
できる。たまたま、レイスナー「ロ
ーマの歴史家」(長友栄三郎・朝倉
文市訳・みすず書房)を見たとする。

すると、「タキトゥスの作家として
の独特な素質に眼をくらまされて、
古代の基準によって見るにしても、
歴史の権威として彼には重大な欠点

があるのを見落とすべきではないと
いうこと、これが最終的な結論にな
らねばならない。……彼の主な弱点
はまさに次の点である。すなわち、
風刺家としての彼がたびたび歴史家
になりすましているということであ
る」と書かれている。タキトゥスと
レイスナーのいずれを信じればよい
のか。ひるがえって、カエサルの記
述はどう考えればよいのか。ウエー
バー「古ゲルマンの社会組織」(世良
見志郎訳・創文社)によれば、「カエ
サルの報告を理解するためには、わ

れわれはとりわけ次の事情を念頭に
置いておかなければならない。すな
わち、彼の叙述の一部は、ちょうど
そのころラインに向かって軍事的に
進出しつつあった一つの部族、すな
わちスエービー族の諸事情にとくに
関係」しているのである。とすれば、
ゲルマン人の全体に關係するとは読
めないことになる。

「それと……」は小説であり、カ
エサルやタキトゥスの作品は小説で
はない。しかし、作者の生きたその
時代の、作者の基本的姿勢が背後に
存在するのは当然である。読者の側
は、自己の基本的姿勢から批判的に
読むべきであるというのが私の意見
である。あまりにも当然のことであ
るかもしれない。

影の学問、窓の学問 市原 靖久

(いちばら やすひさ・法
学部教員。専門は法思想史。
現在は、中世カトリック教
会の反異端神学・反ユダヤ
主義神学と、カノン法にお
ける異端及びユダヤ人に対
する規定との連関に関心を
もっている)

すでに少なくとも十二年間の勉強を終え、さらにこれから大学で学び続けようとされている新入生諸君。

そのような君達には是非読んでもらいたい本が、ダグラス・ラミス著『影の学問、窓の学問』(加地永都子ほか訳、晶文社、一九八二年)である。

この本は、本当の意味の勉強や学問とはどのようなものであるかということを多方面から論じたエッセイ集であるが、書名と同一の表題を持つ序論の冒頭に置かれた(宇宙船の話)が著者の主張を導くいとぐちとなっているので、ここではその内容

を紹介することにしてみよう。

地球からある惑星に向けて移住のための巨大な宇宙船が送り出される。だが千年もかかる長旅であり、途中で数十回もの世代交替を経なくてはならない。もちろん宇宙船には、食料をはじめ、学校、病院、墓、適当な仕事、それに地球文明の完全な記録など、ありとあらゆる人類文化が積み込まれている。

最初のうちは使命感に支えられた。しかし、世代交替が進むにつれて、多くの人が宇宙での生活は耐えがたいと感ずるようになる。虚空に生ま

れ、虚空に死んでいく、ただそれだけの人生。反乱が続発し、宇宙船の社会秩序は破壊の危機に瀕した。

そこで、宇宙船の統治者たちは、人々に真実の代わりに神話と宗教を与えることを考えた。人々は、鋼鉄製の宇宙船こそ全世界であり、宇宙そのものなのであって、神はその中に住む人間たちのためにこれを創造したのだと教えられるようになった。この教理にそって書物はすべて書き改められ、そして、こうした書物の注解を基盤とする新しい学問(内部の学問)が出現する。

ところで、この宇宙船には鍵がかけられた部屋が二つあった。一つは地球に関する書物を収めた図書館であり、もう一つは、窓のある部屋である。あるとき、一人の若者が、好奇心押さえがたく、窓のある部屋に忍び込むことに成功した。彼は窓から外部を見、自分が置かれた状況を

理解した。今まで宇宙そのものとか教えられてきた、自分が生きている世界が、実は虚空を飛び続ける鋼鉄製の宇宙船でしかなかったのだ。若者は自分の見たことを人々に伝えたいと思った。しかし、それを表現しようと言葉は失われて久しく、また、人々もそれを理解する概念を持ち合わせてはいなかった。

警察がやってきて若者は逮捕された。聖職者たちは長い議論の末、彼を解放することにした。彼の語る真実が狂人のたわごとと受けとめられ、それを口にするので彼が社会から忌み嫌われるなら、人々の心をつかむ宗教の力はいっそう強化されるだろうと考えたのである。

事実、大人たちは彼を嘲り笑った。しかし、子供達のなかには熱心な弟子も生まれ、星について語りだす者も出てきた。高僧たちは若者を自由にしたのは誤りだったと気づき、彼

を再逮捕し、人々の敵として死刑に処した。

以上の〈宇宙船の話〉は、プラトンの『国家』第七巻に出てくる〈洞窟の比喩〉の現代版である。著者のいう「影の学問」とは、〈洞窟の比喩〉から採られたもので、洞窟の壁に映った影を現実の世界と思ひ込み、それを詳しく観察し研究するような学問のことであり、〈宇宙船の話〉では「内部の学問」といわれていたものに他ならない。そして、これに對比される「窓の学問」が〈宇宙船の話〉に由来する命名であることはいうまでもなからう。宇宙船の窓は真実を知らせる窓だつたのである。

著者は本書の序論において〈宇宙船の話〉から始めて、影の世界や学問を批判しうる「窓の学問」の重要性をラディカルにわれわれに語りかける。そして、自分たちがどのような位置にあるかを見る助けとなるよ

うな、外部へ通ずる三つの窓を指摘する。すなわち、「過去へ通ずる歴史の窓」（かつてはこうではなかった）、「現在ある他の社会へ通ずる窓」（他の国々では違う）、「純粹な理論の世界にある理想社会へ通ずる窓」（こんな風ではない国のあり方を考えられる）である。

再び、大学での勉強を始めようとしてきている諸君。これから君達それぞれが勉強を進めていくときに、「影の学問」と「窓の学問」について一度は考えてみてほしいと思う。

「辞書」の新発見

西川 和男

(に)しかわ かずお・文学部教員。中国文学科。中国語ことに中国語教育について研究。民間講習会での長い教学経験をもたれる。

新入生の皆さん、まずは入学おめでとうございます。やっと暗いトンネルからぬけ出し、「さあ、大学生活をエンジョイするぞ！」とルンルン気分あなた。あなたの喜び・その解放感がよくわかります。しかし、あなたのような人が一番危ないので。いつ、そのルンルン気分を一掃させるかがあなたの鍵です。でないと、ただ明るくてひょうきんなだけの関大生になってしまうでしょう。

そして、「不本意ながら関大に来たんだ。何がめでたい！」とおっしゃるあなた。関大としては、あなたのような方をより歓迎します。浮ついた心一切なく、より客観的に自分を見つめ、自分はこれでよいのであろうかと常に自問自答しておられることでしょうか。その自問が一番必要だと思えます。あなたのその真摯な態度が必ずや一人でも多くのルンルン気分をいつまでも抜けきららない学生を感化できるものと信じております。

さて、前置きが長くなってしまいました。編集部の方から「これは薦めたい書」を紹介してくれとのことですが、私は語学教師、いつも中国語に泣かされている身ですので、私が「薦めたい書」はただ一言。それは「辞書」。「なあーんだ、あたりまえじゃないか」とお思いでしょうが、そのあたりまえのことが実行されていないのです。第二外国語学習の実状を言いますと、2年間ではなくなんと4年間以上履習しているにも拘らず、辞書一冊ない学生だっているのです。彼らの中には、要領よく、授業には持つて来てもそれは友人のや前輩・後輩のだったりするのものです。

だれもが外国語が好きとは限らず、どうしても苦手な人もいますでしょう。ましてや第二外国語。しかたなく履習している人も多い筈。ではここで、辞書があればこんな喜びもあるということを一つ。授業に出る前に辞書を引いてよく予習してくれば当然一番よいのですが、最低でも授業には辞書を持つてくるのです。そして、

辞書を引いてどんどん我々教員に質問するので。我々教員も常に学生からの質問を待っているのですが、我々教員も人間。間違ふことだってあるし、当然知らないことだってあります。時には、いろいろな事情で予習ができなかったことだってあるのです（——これはあくまでここだけの話。決して口外なさらぬように——）。はたまた、その日は二日酔いで予習はおろか頭さえ正常に働かない時だってあります。そんな時、鋭い質問をして先生の表情を窺って楽しむというのはどうでしょうか。私以外の先生はなかなかしつぽはお出しにはならないでしょうが、私なかなかまげものですから、ちよつと鋭い質問をされるとすぐ見破られてしまいます。

これを何度も繰り返して辞書を悪用していくうちにその引き方も徐々に慣れてくるものです。

最初のうちは、ただ辞書の意味だけを調べるだけで精一杯ですが、慣れるに従つて、その言葉が使われる背景も徐々にわかってくるでしょう。例えば、よく出される例ですが、英語には「転がる石に苔は生えぬ」という表現があり、「苔」はよくないものとなり、転職を何度も繰り返すのはあたりまえのようですが、日本語では「石の上にも3年」と言い、日本では転職ばかりする人間はあまり好ましく思われないうです。

また、日本語では「湯水の如く使う」といい、日本は雨量が多く河川もいたるところにあるので、「水」はほとんど使える対象となつていますが、一方、雨量や河川の少ない中国では、「水」はとても貴重ですので、「水は油のように貴い」という表現になります。

このように、言語にはその民族の思想・文化・経済をはじめ人間社会

に関わる全てが反映されています。辞書を引く場合も、必ず例文までもしっかりと読んで下さい。そうすればきつと、新しい発見があることでしょう。

最後に、これから辞書を買う人へ一言。語彙数や例文のより多い辞書を買つて下さい。英語の辞書でも同じこと。例文の少ない高校生用の辞書ではだめ。第二語学用の辞書は、授業の時にそれぞれの先生より指示を受けて下さい。

では、私の授業を受ける人、しっかり予習をしてくれば充分楽しめませうぞ！

無意識の伝達

和田 葉子

(わだ ようこ) 文学部教員。家に帰れば同居人一名とかわいいう長男太郎がいる。専門は中世英語、特に十三世紀の作品『尼の掟』を研究

コシヒカリと大きく印刷してある厚いビニール袋に入ったゴミが豪邸の門の前に出されている。関西大学のある吹田も、昨年全国でもっとも地価の上昇が激しい所になったなあ……などと考えながら歩いていると、ふとそんなものが目にとまり、思わず笑ってしまった。

言葉だけが情報伝達をするのではない。私達の社会では、真夜中に電話が鳴れば、何か良からぬ知らせかと不安になる、ノックしてすぐさま部屋に入ると、その中にいる人に対して敬意がないと受け止められか

ねないなど、時刻やタイミングも「ものを言う」のである。

私達は無意識のうちに、常になんらかの形で、自分を他人にさらけ出している。そこで新入生の皆さんにも初対面でたいへん失礼とは思いつつ、次の場合が自分に当てはまるかどうか答えてもらい、正体を明らかにしていただくと思う。

一、自分(の家)の料理をほめられると嬉しい。
二、ブランドにこだわる。
三、アイスクリームはストロベリー風味が好き。

四、人前でも古い服を着ている。

五、腕時計に秒針がない。

六、レインコートはベージュ色である。

実はこれは、ポール・ファッセル著、板坂元訳『階級』一九八七年(光文社)で述べられているアメリカにおける「階級」の指標のいくつかである。答えは一〜三が中流以下、四〜六が上流階級の特徴である。その

「こころ」は、上流であれば一、その家のお抱えシェフの作った料理はおいしくて当然であるから、ほめると相手は気分を害する、二、わざわざ、高級品を身につけて他人にそうアピールする必要はない、三、バラが最高級とされ、果物の味はその逆、四、見栄をはる必要がまるでない、五、伝統を重んじるので、最新式のもの敬遠される、六、汚れの目立つ色だが、そうなければまた新しいのを買えばいい、というわけで、レインコートが黒いのは労働者階級

ということになっている。ちなみに私のコートは一見黒に見えるが、実は非常に濃い紺である。日本に暮らすあなたでも本当のお嬢様、お坊ちゃま方ならず見抜けたはずごあますよ。

この本のサブタイトルに示されているとおり、ファッセルにとつて階級とは「平等社会」アメリカのタブー」であり、民主主義をうたうアメリカも、実際はいかに階級にこりかたまつた社会であるかを皮肉たつぷりに語っている。ファッション、家具、食べ物、娯楽、言語——発音の仕方や用法など、かつて英国で話題になつた本のパロディー——などさまざまな側面から、著者は猛毒の舌をふるっている。

訳者は「あとがき」に大真面目で「仕事などでアメリカ人と付き合う機会の多い人たちに、また、これからアメリカに旅行したり長期滞在し

たりする人たちに、本書は得難い情報を提供してくれるだろう」と述べているが、これはシャレであつて、実用書の類ではまったくない。こういう人間はこういう階級、と次々に決めてゆく著者のやり口は、痛快である反面、日常は各自の意識下に埋もれている階級に対する独断的尺度を私たちにはつきりと見せつけているように挑戦的、恐ろしくもある。なお、日本でかっこうをつけたいのなら、田中康夫著「ファディッシュ考現学」一九八八年（新潮文庫）がある。固有名詞をちよつと手直しするだけで、場面はガラリ大阪になつてしまう。

俗世間は性に合っていないという人のために、早速、足を洗つて、遠く中世ヨーロッパに想いをさせてみよう。H・シッパージェス著、大橋博司他訳『中世の医学』一九八八年（人文書院）には医師が広く病人を助け

る人、癒す人であつた時代が生々しく描かれて大変面白い。

今はなくなりつつある理髪店の回転する棒状の看板の由来が瀉血に関係していることは御存知の方も多いだろうが、歯痛やペストにかかった人々も「床屋に行つてきます」と言つて家を出たのだ。今は男性が朝シヤンの後、胸にベタバタつけるオーデコロンも元来ペストの薬であつた。化粧品はもちろんのこと、美顔術もあつて、しわのぼしには「酢の中で柔らかくされた卵と芥子小麦粉とこしょうをこねたものが用いられた」とあるが、聞いただけでしわが増えそうだ。いつの世も同じで、厚化粧のため最後の審判の日に神が本人だと見分けがつかないのではないか、という意見も。信じられないことだが、頭蓋骨を開く手術もしばしば行われていたらしく、詳しい記述が残っている。

とにかく読めば読むほど、酢大豆、デンマーク式ダイエット等が大流行の現代と中世が重なってくる。

今までは私の専門に直接関係のな

い本について述べたが、英文学科に
来られた諸君には是非マーク・ピー
ターセン著『日本人の英語』一九八
八年(岩波新書)を読んでもらいたい。

よみかたことはじめ 私の読書法

石田 浩

(いした ひろし・経済学部教員。講義は外国経済論Ⅰ(中国経済論)を担当。中国農村社会経済構造の研究を自己のライフワークとし、何度も中国農村を訪れて、実態調査をしている。今年中に、その調査研究を一書にまとめる予定である。主著に『台湾漢人村落の社会経済構造』(一九八五)、中国農村社会経済構造の研究(一九八六年)がある。)

本誌編集委員会より新入生を対象とした読書法についての原稿依頼を受けた。編集委員は全く最適任者に原稿依頼をしたと思える。自慢ではないが、私は読書が苦手である。大

学で研究・教育に携わる者が読書が

苦手と聞いて、新入生は自信を持って

るであろう。

私は生来、気が短く、面倒くさが

ちの邪魔くさである。読書には合わない性格である。第一に、本を読んでも早く結論や結果を知りたがり、最後までじっくり読み進むのが

苦手である。第二に、読んでいる途

中、その話題に関連して色々のこと

を連想し、それが一人歩きを始めた

ことを考えてしまい、ただ字面だけを追っている。ハッと気がついて真面目に読もうとするが、果たしてどこまで読み進んだものか分からず、もう一度読み直さなければならぬことがある。第三に、読んでいる本の内容をノートに取ったり、感想文を書いたりするのも全く苦手である。ノートを取るなどということをすれば、恐らく1冊の本さえも読み終えられないであろう。

なぜ、私の読書はこのような状態に陥るのかを考えてみるに、関心の

ない本を読んでいるからだと思う。

本当に読みたい本を選んでいないか

ら、その本の内容にのめり込めない

のである。例えば、有名な作家や専

門家が書いた本だから、ベスト・セ

ラーだから、あるいは経済学部在所

属するので必要な専門書だからと、

このような理由で読んでるのであればイケナイ。我慢が出来ない。試

験の前に教科書をイヤイヤ読むようなものである。要するに、関心や興味がないのに読まなければならないから読む、この時には字面だけを追っていることが多く、全く何も残らない。

そこで、最近は何に居直ることにしている。私は読書に関しては不器用である。だから、他人と同じように出来ない。たとえ古典的名著であつても、芥川賞や直木賞を受賞していても、あるいはマスコミで持てはやされていても「糞食らえ」である。興味があつても読まないと。読んで時間無駄である。これは私の「へそ曲がり」な性格が反映しているのかもしれないが、こうすれば結構精神的に楽である。

もちろん、本を選ぶ場合に興味あるなしに関わらず、本屋で何とはなしに手に取った本が非常に面白く、読み進むことがある。あるいは友人

と議論した時、多くの情報入手して相手を打ち負かそうと、資料を探し読むこともある。要は何にでも興味を抱き、興味を抱いたことに対しては「こだわり」を持ち、その点を徹底的に調べるために片っ端から読書をする。これが大事である。

幸いにして、私は「八方美人」で、何にでもすぐ興味を抱くが、「こだわり」があるので、興味を抱けばトントンそれについて調べる。調べれば調べるだけ面白くなり、それに関係する関心領域が広がる。そしていつの間にか、それを「飯の種」にしている。

私の読書の下手さばかり述べても仕方がない。編集委員が期待する内容に入らなければならぬ。さて、新入生諸君！ 読書なんて「糞食らえ」である。読書は手段、その前に自分の関心は一体何であるのか、何に興味があるのか、出来るだけ早く

見つけ出すことが肝心である。何かに興味を持ち、この点をぜひとも解明したいとなれば、当然それに関する各方面の書を探出し読まなければならない。否応なしに多くの書と付き合わなければならないし、外国文献を読む必要がある場合には語学力も要求される。在学の4年間、5年の人もいるかもしれないが、すぐに過ぎ去ってしまう。

このように書いてくると、どうも説教染みた内容になってしまった。最近の大学生は本を読まないし、買いたくない。何のために大学に来ているのか。このような声ももちろん知っている。これも「糞食らえ」である。在学期間を有効に利用して、大学をレジャー・ランドとして遊びまくり、試験においては要領よく勉強して、適当に単位を取り卒業する者もいてよいではないか。全ては自己の責任において自己に返ってくる

のだから。ただ、先人として言いたいことは、読書とは自分の生き方を探し出すための便利な手段であり、

得るところは多いと。世界は広く、歴史は長く、思想は深い。そして興味は尽きないとい。

から、学生諸君の韓国認識に多大なる影響をおよぼすのは、いきおい研究書以外の「韓国もの」ということになる。

韓国(本)ブームにおける「きわどさ」

李英和

(リ) よんふあ・経済学部
教員。応用理論国際経済学
専攻

いま、すさまじいまでの「韓国ブーム」である。

書店には、「韓国もの」があふれている。専門書はもちろん、漫画やビジネス書まで、硬軟織りまぜて、あらゆるジャンルのものがそろっている。

「ビビンバ」「クッパ」といった朝鮮食が、街の弁当屋で売られているほどだ。「キムチ」を食したことがない人は、いまやほとんどいないだ

ろう。「チョーセン、ニンニク臭い」と強烈なイジメの対象にされた私の幼少の頃を想えば、まさに隔世の感がある。

それはそれで素直によるこべは良いのだろうが、そうもいかない。昨今の「韓国ブーム」には、「ニンニク臭さ」ならぬ「ウサン臭さ」が漂っているように思えるからだ。

「NIE Sブーム」にもかかわらず研究書はあまり読まれないようだ

観光ガイドや料理本などは別にして、韓国の経済・社会関係を扱った「売れすじ」には、共通の特徴があるそうだ。韓国社会の矛盾を「ことさらに暴きたて」「糾弾する」のではなくて、韓国(人)に対する「愛情に満ち」、「一般庶民の息づかい」が感じられ、「常識的」で「等身大」の姿を映し出したものだそうだ。そこに「ウサン臭さ」が潜んでいる。

▲一般に、ある事柄についての概念やイデオロギーや理論は、その時々々の社会の支配階級の利害に影響されるVなどと硬いことを言わなくても、次のような主張が、ほんとうに常識的で、庶民的で、さらには愛情溢れるものと言えるだろうか。

曰く、南北朝鮮間の政治的・軍事

的緊張が韓国民の「滅共統一」の国民的情熱を産み、重化学工業化を理念的に支えた。軍事独裁政権の登場によって韓国史上初めて資本主義的發展の基礎が築かれた、等々。これを「冷酷な認識」と呼ぶべきか、「冷血な認識」と呼ぶべきか、どちらだろう。

高い経済成長率や工業製品輸出の激増といった陽当りの良いところだけを一面的に強調して、その過程で生ずる矛盾を、「発展に矛盾はつきものだ」とか「矛盾は発展の別名だ」とか言って悦に入るのはどうだろう。あたかも半導体やポニーを生産するように、安価で効率よく「政治犯」を大量生産し、民衆をプレス機械にかけるようなことを、常識に照らして「発展の別名」と言えるだろうか。しかも、過ぎ去った遠い過去のことでなく、私達と同時代を生きている隣人のことだ。

残念なことに、学生諸君のレポート

トには、教員の「傾向と対策」を研究・熟知したものである、この種の「冷酷な認識」がしばしば顔を覗かせる。ここに「売れすじ」から逸れている書物がある。題名は「保安司（ポアンサ）」（金丙鎮著、晩聲社、一九八八）、「韓国国軍保安司令部での体験」という副題がついている。進歩的で名の通った出版社でさえ、後難を恐れて出版を引き受けなかったという、いわくつきの書物だ。

著者は、祖国・韓国を愛するがゆえに留学した在日韓国人、突如「北のスパイ」にデッチあげられる。拷問を受け起訴されるが、なんと情報機関（保安司）に特別採用される。何のために？ 新たなスパイを効率良く製造するために。それにしても何のために？ 重化学工業化に国民の情熱を動員し、資本主義發展の確固とした基礎を築くという「歴史的責務」を負った軍事独裁政権を不動

のものとするために。

以後、八四年から二年間、その任務に励むという数奇な運命をたどる。かねてから計画していた日本逃亡の後、想像を絶する体験を記したものが「保安司」である。いったい、何のために？ 先輩・知人・同胞たちの「スパイ」デッチあげに心ならずも加担した自分を賭して、「発展の別名」たる「保安司」——軍事政権を糾弾するために。そして、「傷つき踏みにじられた私の愛する祖国」のために。

このような陽の当たらぬ、陰の部分で、確実に存在する民衆の息づかいや等身大の姿を映し出すことが、はたして隣人愛に欠けることになるだろうか。是非とも考え、そして読んでほしい。できるだけたくさん読んでほしい。

『インディアスの破壊に ついでに簡潔な報告』

ラス・カサス著・染田秀藤訳

木田 和雄

(きた かずお・貿易関係
部門、中南米経済論担当。
代表的な論文「ラテン・ア
メリカにおける土地所有形
態の特質」)

近づく「新世界発見」五〇〇周年

周知のように、ジェノバ出身の航海者コロンブスがカステイリヤの女王イサベルの援助を得てカリブ海のグアナハニ島(サン・サルバドル)に到着したのは、一四九二年一〇月一二日であるので、三年後の一九九二年にはコロンブスの「発見」からちょうど五〇〇年を迎えることになる。これを記念して、ヨーロッパと南北両アメリカ各地で多彩な行事が企画されており、ことにスペインでは、バルセロナ・オリンピックとセビーリヤ万国博の開催が決定、

すでに準備工事が始まっている。

ヨーロッパ中心史観からは、なるほど、コロンブスの地理上の発見が「天地創造につぐ偉業」であり、その五〇〇年後の一九九二年が記念すべき「祝賀」の年であるかも知れないが、この「発見」がその後のスペインを中心とするヨーロッパ諸国の新大陸征服に道を拓いたことを考えれば、サンタ・マリア号の出現こそ先住民受難の時代の号砲であり、その後はまさに「呪詛」の五世紀であつたといえよう。また事実、コロンブス自身、単なる地理上の発見者

に留まらず、先住民に対する圧制者でもあつたのである。

『簡潔な報告』刊行の趣旨

著者のバルトロメー・デ・ラス・カサスは、一四七四年八月、セビーリヤに生まれ、サラマンカ大学で法学を修めた後、聖職に就き、一五〇二年、総督オバントに従つてエスパニョーラ島(サント・ドミンゴ島)に渡航し、一五一三年、ベラスケスのキューバ島征服に従軍司祭として参加、同島の植民者の一人となつた。ところが翌年、聖霊降臨祭に行う説教の準備中、「不正のえものを供物にするのは、神をあなざることである。……貧しい人の持物でいけにえをささげるのは、父の目の前で子を殺すにひとしい」という「集会の書」第三四章の一文に啓示をうけて神意を悟り、自己に委託されていた労働力としての「インディオ」を解放、それいらい一五六六年に歿するまで、

戦闘的な「インディオ」擁護者となり、スペイン人の極悪非道な所業を厳しく告発するとともに「インディオ」の自由と生存権を守る運動に挺身した。

ラス・カサスの『報告』は、あまりにも貪欲な黄金渴望に駆られたスペイン人たちが「インディオ」のキリスト教化の美名のもとに不当な征服戦争を敢行し、大勢の無辜の民を殺戮し、金銀財宝を略奪してきたことを憤をこめて綴った目撃者の証言であると同時に、不正きわまりない征服の弾劾でもある。この『報告』は、一五四二年にまとめられ、ようやく一〇年後に印刷に付されたのであるが、出版の目的は、摂政フェリペをはじめ「インディアス問題」を担当する為政者たちに、人道にもとる征服の即時中止の緊要性を強く訴えることにあった。

慄然たる記述内容

岩波文庫の一冊に収められた『報告』は、訳者の懇切な訳注、解説、ラス・カサス年譜を含めて二〇五ページ、二つ星の小冊子であるが、そこには、読者を慄然とさせる「スペイン人キリスト教徒たち」の数々の蛮行が記されている。その例示として、ここでは、征服初期の「エスパニョーラ島について」からごく一部を引用しておく。

「キリスト教徒たちは馬に跨り、剣や槍を構え、前代未聞の殺戮や残酷な所業をはじめた。彼らは村々へ押し入り、老いも若きも、身重の女も産後間もない女もことごとく捕え、腹を引き裂き、ずたずたにした。：：彼らは誰が一太刀で体を真二つに斬れるとか、誰が一撃のもとに首を斬り落とせるかとか、内臓を破裂させることができるかとか言って賭をした」。

まことに読むだにおぞましい光景であるが、これらは決して捏造された「黒い伝説」ではない。この小冊子が出版されると、たちまち当時のヨーロッパで大きな反響をよび、ほとんどの国で翻訳が出され、たびたび版を重ねた。スペインと敵対する国ぐにが本書を反スペイン政治宣伝に利用したのである。このため、ラス・カサス師にたいして、スペインを告発するに急なあまり、他の国民が犯した同じような非人道的所業を看過しているという非難が浴びせられるようになった。しかし、スペイン人がとくに残酷なのではなく、戦争・征服行為そのものが常に暴力をとまなうものであることは、昭和の皇軍による南京、マレーシア等における大虐殺の例を引合いに出すまでもなく、十分に理解されるであろう。

社会的問題関心を深める ために

杉野 幹夫

(すぎの みきお・商学部
教員、商学関係部門。最近
では総合商社や国際マーケ
ティングに関する研究発
表)

近頃卒業論文などを読んでいて思

うことは、学生諸君の社会に対する問題意識が弱くなってきたのではないかとということである。経済学や商学のような社会科学は、現実の生きた社会現象を対象とするものであり、問題関心の低下は、勉学意欲の低下と結びついているように感じられる。

他方で最近の出版状況を見ると、

世界的な保守化傾向の中で、社会的諸問題を批判的に扱えた良書が少なからず登場している。ここでは、新入生諸君が比較的読みやすいもので、最近出版された経済書をいくつか紹

介することとしよう。

経済学の歴史を概説し、経済学の考え方を示したものとして、宇沢弘文『経済学の考え方』(岩波新書)がある。著者は「経済学者は、暖かい心と冷めた頭脳を必要とする」と強調している。これまでの偉大な経済学者は、現実社会に対する鋭い批判と、新しい価値観の提起を行った人々であった。

もし現在の経済社会が全く矛盾のないものであり、政府や企業などの経済主体の自由な行為にゆだねて良いものであれば、経済学は単に効率

性を追求するための技術論となろう。しかし人間社会の物質的側面を対象とする経済学にとって、合理性や効率性基準では割り切れない社会的諸関係こそが重要な分析対象となる。経済学が価値判断を避けられないのは、そのためである。こうして、経済学の原点は、貧困や不正などの社会問題を解決することに置かれてきた。

しかし最近、経済学をとり巻く環境は厳しいものがある。著者は、現在の大学をめぐる状況が、一九五〇年代はじめのアメリカのマッカーシイズムの時代と相似していると指摘している。ここには、大学と経済学の現状に対する著者の危機感が表れており、私達も日頃注意すべき課題である。

株式相場や証券などに興味ある諸君にも一読してもらいたいのが、林敏彦『大恐慌のアメリカ』(岩波新書)

である。二九年の世界恐慌は、「暗黒の木曜日」とよばれるニューヨーク証券取引所での株価大暴落をきっかけに始まった。都市には食べ物すら手に入らない浮浪者があふれ、他方農村では、売れない食料が山積みされ捨てられていた。資本主義の最も矛盾した姿が表れた。

二〇年代のアメリカは、繁栄を謳歌していた。実質所得は年々増加し、自動車や家庭電気製品などの耐久消費財がブームとなった。国民は株高に熱狂し、誰もが金持ちになれるという幻想を抱いていた。しかしその繁栄も長くは続かなかったのである。資本主義経済は、サイクル運動を特徴とする。好況の後には不況、繁栄の後には貧困である。その意味で経済学にとって歴史を学ぶことの意味は大きい。歴史は繰り返すということだけでなく、歴史から多くの教訓や洞察を引き出すことができるか

らである。最近の個性的消費ブームも、二〇年代のアメリカにいくつかの類似点を見い出すことができるし、繁栄はいつまでも続かないことも肝に命ずべきであろう。

また情報論に興味を持つ人に薦めたいのが竹内啓『情報革命時代の経済学』(岩波書店)である。近年の情報技術の進歩は、経済や市場、社会にも大きな変化をもたらしつつある。ただ著者は情報革命≡社会進歩と簡単に把えてはいない。情報技術の発展が社会にどのような影響を与えるかについては、技術自身が決定するのではない。技術の利用目的を決めるのは社会であり、技術と社会の相互作用がこれからの方向を導いて行く。つまり情報革命の実像を知るためには、技術ばかりではなく広く経済社会に対する認識を深めることが重要となる。

森嶋通夫『サッチャー時代のイギ

リス』(岩波新書)も興味深い。現在の世界では、国営企業の民営化や社会福祉の切り捨てなどの保守政策が大胆に進められている。アメリカのレーガンと並んでサッチャーはその代表的リーダーである。本書ではそれらの政策を支える政治的基盤が、イギリスの社会制度において多角的に分析されている。教育における利潤原理の導入に対する、著者の批判は、そのまま日本の状況にあてはめることができよう。

アジアの考察と外国人労働者

大西 正曹

(おおにし まさとむ・社会学部教員。産業社会学専攻。東大阪の中小企業の問題、とりわけ国際化における問題の研究)

アジアは今日、深く私達の生活と係わっている。私達が日常使用する多くの製品の中に、これらの国々で生産されたものが数多く存在している。

人、物、金のあらゆる面からアジアを無視して今日の私達の生活を考えることはできない。今日の日本の豊かさも、その多くの部分をこれらアジアの国々との関係で維持されている。

従来、日本とアジアの国々とは、経済的な面からの考察がかなり見られた。しかし、私達の生活と密接に

結びついているこうしたアジアの人達の生活、文化、労働などについて私達はどれ程の知識を持っているのであろうか。

先日、台湾、韓国の労働問題について、ビデオを使用して講義したが、多くの学生は、経済、観光面についての知識は持っていたが、彼等の生活、労働について全く無知であった。アジアの多様性に富む歴史、文化、生活を私達は勝手な単一の価値基準でもって見てはいないだろうか。

シンガポールやマレーシアの指導者達が、日本に学べというのを聞く



も、アジアの模範とされているように、自分達の価値基準があたかも、アジアの模範とされているよう



な錯覚におちいたっている。そのためかつてアジアに進出した日本の企業の中にあつて現地とトラブルを引き起こしたり、アジアを卑下する場合もあつたり、日本人がアジアから鼻もちならない感情を持つて見られている場合もあつた。

しかし今日、多くの進出企業は現地化にかなりの努力をしており、またその国の産業化、教育、文化にかなり貢献している。

今日の深く密接に関係しているアジアを考察する書は数多く出版されているが、その中で比較的人門書的な内容を持つものとして次の二点がある。①の著書は、アジア各地に生きている人々の生きざまや文化について、また、日本とアジアとの関係について全十二編が納められており、その(Ⅰ)に東アジアについて、東南アジアが(Ⅱ)に納めてある。

②の著書は、今日、多くの問題を

含んでいる。東南アジア、南アジア、中国諸国からの出稼ぎの人々の日本での生活や、労働、さらに「彼ら、彼女らは、なぜ、どこからやってくるのか、そしてどのような生活をして、どのような思いをいだきながら、日本で生活をしていくのか」考えた毎日新聞の記者が八十七年から取材、調査した、報告集である。四十数本の報告が納められてあり、日本における、外国人労働者達の現状を考える上での入門書として最適である。

(1) 小島晋治他「いまアジアを考えるⅠ」

小島晋治他「いまアジアを考えるⅡ」三省堂 一九八五年・

一、二〇〇円

(2) 毎日新聞東京本社社会部編「じはんぐー日本を指す外国人労働者」毎日新聞社一九八九年・

一、三〇〇円

ビートルズの時計 多喜弘次

(たき ひろつく・社会学
部教員。マスコミ研究、特
に情報化とメディアの関わ
り、ジャーナリズム論に関
心深し。ニューメディア関
連の著書論文多数)

千倍進む時計をもらった。二〇年
も前のことである。

その贈り主、ビートルズについて
は語り尽くされているようだが、ど
れを読んでもあの頃の体験と一致し
ない。音楽論としては『ビートルズ・
サウンド』（CBSソニー出版、一
九七九年）はたいへん面白い。英国
ポップス史の中での位置を考えるに
は、『アビー・ロード』（邦訳JJC
出版局、一九八五年）が参考に
なる。しかし電子楽器とデジタル
の今日、ビートルズ音楽論はどこか
虚しい。六〇年代後半の当時でも、

クリームやレッド・ツェッペリン、
あるいはジミー・ヘンドリクスとビ
ートルズを比べる愚はなかった。

当時の我々は楽器演奏のテクニッ
クに惚れていたわけではなかった。
詩やメロディは好きだった。それと
ても、一曲単位でとらえるなら、ビ
ートルズの最新曲よりよくできた曲
は他にあった。むしろ、三ヵ月から
半年単位で発売される新譜の示す変
化に驚嘆したものだ。次々と登場す
る新曲を既成のポピュラーとかロッ
クという枠でとらえることさえ躊躇
するほど、ビートルズの新曲はまさ

に新しかった。いつもそのとんでも
ない新しさを期待し、新譜の出るの
を心待ちにしていた。邦盤より数週
間から一ヵ月は早く店頭に出る輸入
盤を高価だが買い、そして期待はい
つも十分充たされるのだった。

〈新しさと変化〉が、どうやらビー
トルズの魅力のキーワードらしい。
『ラブ・ソウル』以降は、LPの全
曲が新曲となって塊になって登場す
る。二枚組LP、通称ホワイト・ア
ルバムの時は、一九六八年当時で五
千円した輸入盤を買い、まず全曲聴
いた後に、AからDまでの四面を各
々一週間、従って一ヵ月かけて全三
〇曲を聴き込む。その三〇曲がまた
各々似ていない。過去の曲と異なる
だけでなく、一つのLPに収まって
いる曲同士の類似性の低いのも、ビ
ートルズ音楽の特徴であった。

変化はまた、各メンバーの風貌や
活動にもあてはまる。公演旅行を止

めた一九六六年半ばから解散の七〇年までが特に著しい。一〇代で登場して大人になっていく我国のジャリタレとは違って、二〇代半ばの頃のほんの二、三年間に大変貌を我々に見せた。今でも映画『レット・イット・ビー』をVTRで見ると、なんでもマッカートニーが当時二六歳でレノンが二八歳なのか不思議でたまらない。派手な縞模様ジャケットを着て、首にスカーフとは呼べないタオルを巻いていたかと思うと、オードックスなスーツにヘンリーネックのTシャツ。スーツに白いスニーカーというのも斬新に見えた。レノンの「おばあちゃんメガネ」は何とも恰好よかった。この辺の推移は『ビートルズ現役時代』(シンコー・ミュージック、一九八七年)として、当時の主たる情報源『ミュージックライフ』誌上の膨大な記事が復元されている。

TV用映画『マジカル・ミステリー・ツアー』は、まとまりの無さで酷評を浴びたけれども、その前後の単発物と合わせて、音楽と映像の複合的効果を發揮する手段として、今日のプロモ・ビデオに息づいている。何より自らのプロモーションが若者にも可能であること、言い換えると自律的生き方の可能性を、ビートルズは教えてくれた。アップル社の創設はその典型である。ホワイト・アルバム of the ラベルを初めて見た時、おおげさに言えば、体制内での独立に興奮したものだ。レノンは七〇年代初頭に「ビートルズを信じない。夢は終わった」と歌った。けれど我々にとつては、あれは夢ではなかった。H・デビイス『ビートルズ』(邦訳 草思社、一九六九年、同増補版邦訳、一九八七年)は、彼らの活動が夢でなかったことを克明に記録してくれている。デビ

ューから解散直前までのレコード製作活動については「M. Lewison "The Complete Beatles Recording Sessions" (Harlyn, 1988) が絶好の資料である。きたやまおさむ氏が「ビートルズを知らない世代に」と記した『ビートルズ』(講談社現代新書、一九八七年)とか、『ビートルズ現象』(紀伊國屋書店、一九七八年)や他の著書で中野収が行う社会学的分析などは、どこか場違いのようで気味悪い。音楽家らの私的ビートルズ論集『音楽の手帖・ビートルズ』(青土社、一九八一年)を読めば十分だ。当時の記憶とこれらの記録に比して、小生の現実には実に単調である。進歩がない。「あの頃のレノンやマッカートニーより俺の方が一〇歳も年上になっているのに……」と落胆しては、女房に「比べる相手を間違っている」と軽く嘲笑される。千年かけても不可能なほどの変化を、多感

な中高生であつた私は数年間に凝縮して直に見てしまった。以来、ピートルズの時計はせわしく私を追い続ける。三ヶ月や半年ごとに私のどこ

を変えられようか。そろそろ「こんなものだ」と自分に手をうつべきなのか。Life is very short. and there's no time.

『意見の確立のために』

引原 隆 士

(ひきはら たかし・工学部助手。
昭和六二年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。同年より現職。
専門分野は、発電機などの磁界計測およびモデリング・カオス現象など非線形現象の解析など。現在、パワーエレクトロニクス・磁気浮上などの研究に従事。)

近年来、予想はされていたが、様々な問題点を残しながら昭和が終了し、思いもよらず我々は時代の変わり目に立ち合わされてしまった。これに伴い、これから時代に対する評価が繰り広げられて行くであろう。しかし、意識の流れは将来への潮流が強く、我々が自分の視点で昭和の評価を行うのは難しい。そのため、いくつかのジャーナリズムの意見を充分

に吟味せずに取り入れてしまいがちである。こんな時であるからこそ自分の視点を定めて、じっくりと考えて行きたいものだ。

さて、我々が自分の意見を確立するのに、議論がほとんどなされていないことを読者の方はお気付きであろうか？我々は子供の頃から、与えられた正解を覚えること、与えられた方法で解を得ることばかり訓練

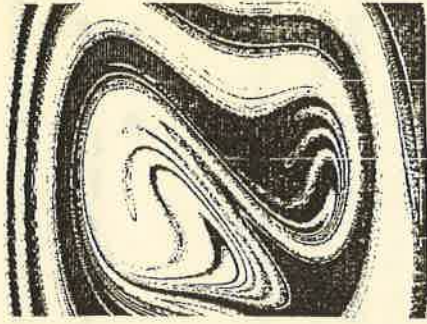
されて来た。そのために費される時間ばかりが多く、他人と議論するという訓練が全く成されていないのである。

議論とは、自分が知り得る事実を分析し、自分の意見を組み立ててそれを主張すると共に、相手の意見と論争するというものであることは言うまでもない。訓練がなくともここまで可能であろう。しかし、自分と異なつた意見と対峙したとき、訓練の有無が問題となるのである。

双方の訓練ができている場合には、他人の意見の問題点を自分の知る事実から検証・指摘し、同時に自分の意見を再チェックする。ここで指摘を受けた側は、全く可能性がなくなるまで自分の意見の妥当性を持ち続ける事実からして演繹して主張し、逆に相手の矛盾を指摘してゆく。その結果、議論を尽し、双方が納得した上で一つの議論に達することができ

るのである。そして、次の議論へと意見をまとめるのである。

ところが、一方の側でも訓練ができていない場合には、その人は自分の意見の説明がうまくできないばかりか、相手に問題を微妙にすり替えられて議論に負けてしまう。その結果、負けた人はそれが議論であることを忘れて相手に自分の全人格を否定されたように思い込み、感情的な



争いとなる。このような状況は、我々の周囲でよく見受けられる。学会においてもしかりで、これでは次の議論が起こせないのである。

議論を尽くすという行為は、これまで日本では慣習的に否定されているようだ。現在でも、「根回し」なる行為がまかり通っているのは、その名残りである。私が所属する工学系の学会誌でも、議論を誘う論文はほとんどない。あるのは、当り触りのない(っ)ものばかりであると言っても過言ではない。本質的に新しい意見を述べるときは、たとえ誤りであっても、議論が衆目のある場所ですくされるのが大切なことだと思ふ。これが、新しい分野への突破口となるだろう。

読者の方々にも、これから事実を積み上げて分析し、自分の視点で従来の理論を再度検討して頂きたい。そして、世に新しい議論を起こして



頂きたい。

次の書籍は事実を把握し、自分の意見の確立に参考になるでしょう。

- (1) 柳田邦男・事実の読み方 新潮社
- (2) 中谷宇吉郎随筆集 岩波文庫

緑一二四ノ一

まわりに目を向けよう

山本 登

(やまもと) のぼる・工学
部教員 数学科 位相数学
の中のホモトピー理論専
攻

入学おめでとう。受験一色の生活から解放されて、のびのびした気持ちで日々を送っていることでしょう。

アルバイトもしたいし、なによりもまず思い切り遊びたいと思っていることだろうと思います。しかし、学生時代はきみたちの人生のうちでも自由に読書をすることができる時期でもあります。とくに教養課程のあいだは、一生のうちで最も感受性が鋭くなる時期でもあり、しかも、講義が語学を除いてはそれほどハードではないので、自由な時間を比較的多くとることができます。この時

期こそ、専門にとられないで貪欲に読書をすすめることができるのです。この時期に読書を通じて広い知識を得ておくことによって、きみたちの人生に測ることのできない影響を受けることができるでしょう。ややもすると、すぐに役立つことだけが追い求められる世の中ですが、一見すぐに役に立つようには見えないものにも人生にとって貴重なものがあります。学生時代の読書は、そういったものの一つであるといえるでしょう。

みなさんは、受験勉強を通じて、

社会について一通りの知識を持っていると思っているかも知れませんが、社会には学校では習わないことがたくさんあります。例えば、世界史は習っても世界の現状については学校ではほとんど教えられていないのではないかと思います。だから、みなさんは時折新聞で報道されることを除いては、海外の現状についてあまり知らないのではないのでしょうか。

岩波新書の「バナナと日本人」は、世界の現状のうちで私たちと深いかわりがある問題を知るうえで、非常に参考になると思います。この本では、おもにフィリピンにおける多国籍企業によるバナナ生産のありさまがのべられています。私たちが日ごろ口にしてしているバナナが、どのようにして作られ、現地の人びとがそれとどうかかわっているかについてはあまり知られていませんが、この本ではそのことが簡潔にまとめられ

ています。なお、この本で取り上げられてゐるのは、八六年二月のアキノ夫人による「イエロー・レボリューション」以前の状況であります。多くの人びとの期待を一身に集めて登場したアキノ政権は、その後人びとの期待にこたえることができず、フィリピンの現状は以前のマルコス政権時代とほとんど変わらないものになってきています。したがって、この本に書かれている状況は、現在も変りがないものと思われず。その後変化した点としては、この本が書かれた頃と比べて、日本企業のかかわりがさらに深まったことがあげられるでしょう。

この本を読む際に少し注意してほしい点は、この本を読んで現地の人びとに同情して、日本の援助をもつと増額すればよいと単純に考えることは間違いだということです。最近、日本政府は、東南アジア諸国をはじめ

めとする発展途上国に対する政府開発援助を大幅に増額しようとしています。しかし、これで日本人の務めが果たせると考えるのは誤りです。

というのは、政府開発援助は、たしかに現地の開発に使われますが、それは現地の人びとの生活を向上させるためというよりは、日本の企業が現地に進出する際の環境を整備するために多くが使われています。したがって、政府開発援助が強められれば強められるほど、かえって現地の人びとの生活が悪化することさえあるのです。わたしたちがすべきことは、「援助」を増額することなどではなく、まず現地の人びとの現状をできるだけよく知り、さらにこれらの人びととの交流を深めることだと思えます。

この本の他にも「サッチャー時代のイギリス」、「ドルと円」、「エビと日本人」（いずれも岩波新書）などは、

どれも新書版で容易に手に入れることができ、しかも内容も豊富で、私たちをとりまく世界の現状を知る上で大いに参考になる書物であるといえるでしょう。

みなさんが、豊富な時間を有効に使った貪欲な読書を通じて、私たちのまわりをとりまく社会の状況について目を向けていくよう願っています。

— 寄稿 —

内藤湖南の朝鮮統治論

—— 併合へむけて ——

日本が朝鮮を侵略し統治した過程には、節目となるいくつかの事件があった。日韓議定書の押しつけ、日韓併合、三・一運動は、とくに注目すべき事件である。これらの事件に直面した日本国内では、いく人も論者がさまざまな意見を述べた。内藤湖南もその重要な一角を占めている。『大阪朝日新聞』に発表された多くの湖南の論説の中には、朝鮮の植民地統治についての見逃すことのできない見解が数々ある。それにもかかわらず、これまでの湖南研究ではこの問題にはほとんど触れていない。この小論は、日韓併合にむけての湖南の朝鮮統治論をみようとするものである⁽¹⁾。

西 重 信

一、「日韓新議定書」⁽²⁾

日露戦争開戦直後の明治三十七年二月二三日、日韓議定書が調印された。ほぼ同時に、湖南はこれについての論説を発表している。そこでまず注目されるのは、議定書の性格を日清戦争時に結ばれたいわゆる日韓攻守同盟と比較して高く評価した点である。明治二十七年の盟約では、第三条で「此盟約ハ清国ニ対シ平和条約ノ成ルヲ待テ廢罷スベシ⁽³⁾」と規定されており、日清間での講和が成立すれば失効するものであった。これに対して議定書では、第四条で「第三国ノ侵害ニヨリ若クハ内乱ノタメ大韓帝

国ノ皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危険アル場合ハ大日本帝國政府ハ速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ル可シ」⁽⁴⁾とされている。「第三国ノ侵害」とは日本にとつては当面ロシアの脅威をさす。だがここで注意すべきことは、議定書が無期限に有効である点である。湖南もこの点にもっとも大きな賛同を寄せている。

続いて湖南は、議定書第三、五条をとり上げる。第三条では韓国施政に対する日本の忠告権が定められており、第五条では韓国が議定書の主旨に反した協約を第三国と訂立することを禁じている。韓国内政と外交への大幅な干渉権を獲得したわけであるが、このことについて湖南は次のようにいっている。

其全く被保護同盟国たることを明らかにしたる者に
して、本協約の牢固を保證する者と謂ふべし。
韓国を明確に被保護国としてとり扱つており、議定書の調印をもつて事実上の植民地となったことをいい表している。

そして湖南は、議定書の内容には当時としては大きな欠点はないとして満足の意を表したうえで、「協約の精神」を実現させるためとして次の提言を行っている。

韓国皇帝に数月間、本邦漫遊を奉勸し、親しく制度文物の美を視察せしむること是れなり。此議は吾輩嘗

て、昨年に於て一度之を唱へ、其権臣李容翊の漫遊と共に、極めて必要なりとせしが、今や其後者は既に実行をみたれば、更に喫緊なる前者も、同時に実行せられんことを切望せざるを得ず。

李容翊に続いて韓国皇帝の日本訪問をも実現させようとするものである。皇帝が日本の制度文物を直接視察することにはそれなりの意義もあろう。だが当時は日露開戦の直後である。このような状況下で交戦国の一方が第三国の皇帝に数ヶ月もの滞在をすすめることがきわめて異常であることはいうまでもない。ひるがえつて考えると、日韓議定書の調印まであくまでも日本とロシアとの間で中立を維持しようとしてきた韓国政府に対して、漫遊に名を借りて皇帝を人質にとるものといえよう。

二、「日韓新協約の結果一二」⁽⁵⁾

日韓議定書が韓国に与えた影響について論じたものというより、むしろ将来への提言である。内容は鉄道敷設、幣制改革、関税改革の三点に及ぶ。その中でもっとも力説されているのが鉄道についてである。まず營口と新義州を結ぶ營義鉄道の敷設とその意義が提起されている。營口は大連開港前における満州（中国東北地方）唯一の開港場であり、遼河の水運と渤海の沿岸航路を合わせ

もつ。

意ふに戦争の進行は、吾輩の素論たる、營義鉄道の敷設も、亦自然に行はるゝに至るべし、また行はれしめざるべからず。是れ戦後の経営に際し、先ず動かすべからざる地歩を当該地方に占むるに於いて、其有力なること、反て軍隊通過の上に出づる者あり。

すでに日露戦争後の満州経営という立場から説明されている。さらに戦前ロシアが満州に縦横に敷設した東清鉄道と比較することによって、營義鉄道の重要性をいっそうひきたたせている。すなわち、東清鉄道は戦勝の結果として当然日本の手に入るであろう、しかし貿易輸送路としてはすぐには役立たないというのである。日露戦争の結果に湖南が余りに樂觀的な予想をしていることには驚かされるが、それはさておきロシアが莫大な資本を投下した東清鉄道の利用価値を否定した点も大胆な判断である。それとは逆に、營義鉄道には大きな期待が寄せられている。その理由を湖南は次のように説明する。

營義鉄道に至りては、然らず、若し京釜、京義の兩線路にして貫通し、北京、天津より以て釜山に至るまで、直通の列車を運転すること、ならんには、従前北清貿易が冬期凍河の為に、数ヶ月の休業を為したる習慣も、漸次に破除することを得て、北清五省、蒙古地



方産物の吞吐は、之を仁川、釜山に於てすること、なるべし。是れ我が被保護同盟国たる韓国の富源を養成するに於て、少からざる効力あること疑ひなし。

ここには、營義鉄道と京義（京城―新義州）、京釜（京城―釜山）鉄道との貫通による釜山から北京、天津に及ぶ貿易輸送路の構想が明らかにされている⁽⁶⁾。実現すれば、清国北部五省と蒙古の物産は釜山や仁川で吞吐される。この構想では、冬期における河川輸送の困難の解決と、それにもまざる国境を越えた貿易輸送の一貫性とい

うきわめて高い経済的合理性が追求されている。しかし、最大の問題は、それがあくまでも日本を中心にした考え方であつたという点である。もつともよい例が韓国の置かれた立場である。京義・京釜の両鉄道は日本と満州とを結ぶための通路であつて、湖南のいう「韓国の富源の養成」はその結果として第二義的なものでしかない。このような考え方からは、朝鮮や満州への帝国主義的侵略に対する批判はでてこない。

鉄道について掲げられた問題が韓国の幣制改革である(7)。韓国の不安定な貨幣制度をこの機会に改めようとするものである。だがこの場合も、そのきっかけは韓国経済の発展や安定のためではなく、日本の対韓貿易にとつて障害になつていたからにはほかならない。湖南は三つの具体的方策を順に上げている。当面の軍事上の要求から韓国での日本貨幣の流通を承認させ、ついで両国間の通貨同盟へと発展させる。さらにこのような制度を満州へと拡張させようとするものである。湖南は、ロシアの東清鉄道経営を範にとつて次のようにいつている。

京釜鉄道の完成せる後に在ても、其沿道に於て、我が貨幣を行用すること、満州に於けるルーブルの若くなることを得ずば、其不便や言ふべからざらん。

湖南においては、韓国の幣制改革は植民地経営をめざ

す一段階であつたことをよく表している。

日本と韓国との共通関税制度は、このような考えから必然的に提起されたものである。戦時の軍需品免税制度を拡大させ、平時でも海関共通制を採用させようとするものである。ただし、韓国を経由する第三国製品の日本への輸入には嚴重な注意を促している。欧米諸国の工業製品に対する警戒であることはいうまでもない。

三、「韓国改革の頭緒」⁽⁸⁾

明治三十七年八月二二日に調印された第一次日韓協約では、韓国政府に対して財務における日本人顧問、外務における外国人顧問制及び第三国との条約締結についての日本の承認制が規定された。この協約について湖南は、日韓議定書からすでに半年もの時間を空費したといながらも歓迎している。しかし、満足のいくものとはいっていない。第一に、日韓議定書で定められていた韓国政府への忠告権行使への不満を述べている。いくつかの実例があげられている。たとえば、韓国駐在林公使が皇帝に自由に謁見できるようになつたのはようやくその当時になつてであること。また「荒蕪地事件⁽⁹⁾」では日本の主張が徹底されなかつたこと。これらの事例は、韓国政府には日本の忠告に対する選択の自由が残されている。こ



とを示し、逆にいえば日本は忠告権を放棄したものと
思われてもしかたがないという。さらに議定書では外交に
関する忠告権は第五条の規定のみという欠陥があり、こ
れは新協約第三項で補われたもののこのような欠陥が存
在したこと自体が当局の過失であるという。湖南は「日
韓新議定書」で議定書には大きな欠点はないとの見解を
表していた。ところが、ここでは一転して外交への忠告
権の不備を強調する。しかし、その間の理由については

湖南は何も述べていない。

新協約第一項に基づき、目賀田種次郎が大蔵省主税局長から韓国財政顧問に就任するのはこの年の一〇月である。湖南はそれに先立って顧問政治の効果に大きな疑問を投げかけた。これが不満足の原因である。ここでは、清国直隸総督下での日本人顧問の例を上げて財務顧問の権限に疑いもたれている。湖南によると清国の場合、袁世凱の直接顧問という契約であったにもかかわらず、軍務顧問を例外としてたんなる各種実務顧問にすぎないという実情であった。従って総督の判断を左右させることは到底不可能である。清国の地方政務と同一には比較できないとしながらも、韓国財務顧問も皇帝ではなく度支大臣の顧問となってしまう恐れを指摘する。また、たとえ財務顧問が財政策を立案しても、度支大臣以下、觀察使、郡守に到るまで新しい政策を遂行できる人物はいないともいう。だからといってすべての官吏に日本人顧問をつけることは、韓国の行政費においては到底無理というわけである。すなわち湖南は、財務顧問の権限と政策実施の二つの面から顧問政治そのものを非合理的な方策として批判する。そこで、顧問政治にかわるものとして提起されたのが次の意見である。

即ち国政最高の総顧問は、一人あるべし、若し之を

置く時は、須らく公使を廃する時たるべく、公使を置かば、総顧問を要せず、而して孰れにしても其人物は、韓帝並に其斗筭の大臣輩を對手として喧嘩を買ふが若き人たるべからずして、少なくとも喧嘩より超絶して、韓廷を指導する人たるべし。其他各部の政務に關しては、顧問政治を取らんよりは、寧ち日本人を以て韓国大小官吏に採用するの制を取るべし。

駐韓公使を廃止したうで韓廷を指導するただ一人の国政最高の総顧問とは、総督以外にはない。その下の大小官吏には朝鮮人ではなく日本人を採用せよという。このような提言の行きつく先には、併合による総督政治しかない。湖南は、もつとも急進的な朝鮮併合論者の一人であった¹⁰⁾。

△注▽

- (1) 湖南は、日韓併合と三・一運動に際しても強硬な統制論を展開している。これについては他稿を期してとり上げてみたい。
- (2) 明治三十七年二月二十八日。『内藤湖南全集 第四卷』(昭和四十六年、筑摩書房) 四一―四二頁。以下『全集』と略す。
- (3) 『全集』四二頁から引用。
- (4) 細川嘉六『植民史』(昭和一十六年、東洋経済新報社)

二三八頁から引用。

- (5) 明治三十七年三月二日。『全集』四三―四四頁。
- (6) この構想と湖南の「北朝鮮ルート論」とがどのような関係にあるのかについては筆者にとつての課題である。
- (7) 韓国の幣制改革については、このほかにも翌三十八年一月二二日「韓国の幣制実行」(『全集』一四六―一四七頁)がある。
- (8) 明治三十七年八月三〇・三一日。『全集』一〇七―一〇八頁。
- (9) 東京裁判所検事正や大蔵省官房長を歴任した長森藤吉郎が、韓国政府に提出した「荒蕪地開墾契約案」をめぐる事件をさしているのではないかと思う。長森が、五〇年間の契約で韓国の山林原野、荒蕪地の開墾経営権を得ようとしたものだが、韓国では土地掠奪計画であるとして大きな反対運動が起こり、計画は失敗に帰した。
- (10) 朝鮮併合論者には、このほかに海老名弾正や徳富蘇峯がいる。これらの併合論に対しては、社会主義者によるすぐれた批判があった。詳細については拙稿「幸徳秋水の朝鮮観」(季刊『三千里』第一七号)を参照されたい。(にししげのぶ・本学経済学部卒業生)

— 連載 —

研究余滴 ヴェルレーヌ 12

どん底の中で『愛』を(Ⅰ)

山村嘉己



ヴェルレーヌ自画像

1

晩年の諸詩集の内容と構成がそのまま示しているように、死に到る一〇年ほどのヴェルレーヌの生活は大きく動揺して鎮まることがない。前回述べた『昔と今』の発表後、生涯を通じて怨恨と呪咀的でありながら、またつきせぬ未練の源でもあったマチルドとの離婚訴訟によってまたまた追い込まれた気分になったヴェルレーヌは、ついに母を道連れに自分も死のうとナイフを持ってかの女に迫った。たまりかねた隣人の提訴によって裁判所はかれを召喚し、一ヶ月の禁固と五〇〇フランの罰金をい



ゲージャの監獄

いわたす。この体験は短いとはいえ、かなりの痛手をか
れにもたらした。詩集『平行して』のいくつかの詩篇（「月」
と題された六篇）はその時のかれの心を残りなく示して
いる。

俺の心を食いつくす時間よ お前を殺すため

俺は純潔な愛の青く美しい日々にかのほり

「女たち」の首にはなく「かの女」の手にするやさ
しい接吻の音で

俺のいやらしさも恥ずかしさもなだめたいと思うのだ

俺は今のはあの恐ろしい暴君チペリウス、

何がどうあろうと泣こうと笑おうと

むごい幸福など遠く離れて眠ることだ

そしてあの生つちろい娘っ子たちを夢みるのだ

鐘楼が一二時を告げて月の光が白々と光るころ

芝生の上で一踊り、祭りの中で清かったあの娘っ子た
ちを

（「月」のⅠ）

（なお終わりの二行にはランボーの『地獄
の季節』のパロディが認められる。）

牢を出てバりに戻ったヴェルレーヌは息つく間もなく
アルデンヌに赴き、僅かばかりの義理をあてにアティニ

ーからクーロムへと旅を試みる。天気はよくアティニ
では祭りの最中だった。あのランボーとの放浪の思い出
のような一刻があつたらしい。

それは変わっていた、悪魔も笑うに違いなかった

夏のその日に俺はすっかり酔いしれていた

何とも形容しがたい歌姫で

その吐き出す言葉のひどいことっていつたら！

もうもうと立ち込める煙草の煙の中で

ちろちろ燃える石油ランプのかけで鳴るピアノ

俺は肝臓が燃え上がっているように思った

しゃべっている言葉も変に聞こえた

こんな小さな村らしい居酒屋の中で

俺はふらついていた、少しばかりのクリームをなめな
がら

ホモらしい目付きの三人のがきどもが

俺のしかめっ面を上げしげと見つめていやがった

駅から遠くない所で、この覗き野郎たち

俺のことを大っぴらに笑いやがった

それではがみがみと叱りつけてやったので
危なく葉巻を飲み込むところだった

俺は戻つて来た、耳には声が残っており

足は千鳥足、誰か、誰もいないのか

誰かが俺にふれたかな、ああ完璧な夜だ

おや、いやな夜明けの鐘が鳴る

〔土星びとの詩〕アティニー一八八五、五
月三十一日—六月一日『平行して』より



ミディホテル(1階)

こんな浮かれた心はすぐにしほみ、少しばかりの金

を得ただけでかれはバリに戻った(七月中旬までに)。
そこでやっと見つけたのがクール・サンフランソワ、
モロー街の「ミディ・ホテル」だった。プチ・フィス
によれば、ヴェルレーヌ自身が認めているように、
「ほとんど女郎屋」で、典型的なゾラの世界だったと
いう。

一階にある詩人の部屋は、湿った壁紙のはめ木の
床もタイルもない、踏み固めた地面の部屋であり、
明かりは鉄の格子のついた窓一つから来て、狭い廊
下一つを隔てて酒屋の小売店があった。……ベッド、
小さなテーブル、二脚の椅子、ストーブと戸棚が道
具の全てであった。

(「ポール・ヴェルレーヌ」平井訳)

2

住まいは貧弱の極みであったが、この頃のヴェルレー
ヌの周囲には旧友のドラエー、ルベルチェ、ヌーヴォ、
リラダン、マラルメたちのほかに、ジャン・モレアス、
シャルル・モリス、ジュール・テリエ、ルネ・ギル、ル
イ・ル・カルドネル、ヴィエレ・グリファンなどの後に
「デカダン類唐派」「サボニスト象徴派」に名を連ねる多くの若者たちが集い



ヴィケール

つつあった。ヴェルレーヌは後には「類唐派」には嫌悪を示すが、例によって酒好き・話好きの性格から、けなしの金をはたいてはよくかれらと飲み明かしたようである。とくに「リュテース」誌の若い二人の詩人ガブリエル・ヴィケール、アンリ・ポークレールに誘われ、ブル・コットン（ヴェルレーヌを英語にもじったもの）の筆名で戯作めいた詩をいくつかものにしたと思われる。このような交遊の雰囲気は「ブレ・デカディスム」と名付けうるもので、ロマン主義の最後に咲いた小さな花、「病的で奇妙な季節末の花」であったが、ここにすらフランス詩革新の希望はひそめられているとヴェルレーヌは信じたかったのである。



ポークレール

しかし、この友たちの波が去ると孤独が痛切にかれを襲う。またもや性こりもなく母を求められ、そして、その願いを無視できぬ母は九月ごろにこのホテルに移り、二階に住み着くこととなった。勇気を取り戻したヴェルレーヌは少しの仕事でも見つけ、再起の夢を見始める。ただ一つの膝の関節の痛みのひどさを除けば。そして同じ頃、そのかれをひどく喜ばせた一人の訪問客があった。それはランボオの恩師イザンバールで、しかももう見ることもないと思っていたランボオの初期の詩篇のいくつかと重要な資料とを所持していたのだ。中でもかれを喜ばせたのは一八七〇年八月二五日付けの「ぼくはポール・ヴェルレーヌの、美しい装頓の一二折判エキュ紙の『雅宴』を持っています。とても奇妙でおかしなものです。しかしそれはたしかに大したもの……同じ詩



「今日の人」シリーズ——ヴェルレーヌ

人の小さな詩集『良い歌』をお求めなさるようおすすめます……』という手紙であった。「ぼくは有頂天だ、失ってしまったと思ひ込んでいた詩や散文など、どっさり見つかったのだ。イザンバールに会ったら、ランボーのはじめの頃の詩を貸してくれたのだ」(一〇月一日ヴァニエ宛)とその歓喜の極みを隠そうともしていない。

このヴァニエは新しい企画でヴェルレーヌにさらに元気を与える。それは『今日の人』シリーズで、イラストつきの作家の評伝であったが大体、月一回の発行で、かなりの評判を得、ヴェルレーヌには一号につき一〇フラ

ンの収入をもたらしたようだ。一月にルコント、ドリール、一二月にフランソワ・コベ、さらに自分自身、リラダン、マラルメ、シルヴェストル、E・ゴンクールと続いている。一方、体調の方もやや好転し、一二月一四日のドクトル・ジュリアン宛の手紙では、「足は大した痛みなしに約1cmは曲がる、一寸努力すればそれを持ち上げて、縦にも横にも動かせる」と報告している。かくて、創作欲も順調に伸びたかれは、この年の末頃、散文の追想記『男やもめの思ひ出』、小説『ルイズ・ルクレルク』を完成し、詩集『愛』もほぼまとめ、さらに『平行的』と『幸福』という些か趣を異にした詩集を構想するに到っている。

3

一八八六年は、しかし、暗い幕開で始まる。先ず一月二一日、不幸な母が七七才で亡くなった。自らの病状も悪化していたヴェルレーヌは母の死目にも立ち会えなかった。親不幸の仕上げともいえるべき出来事だった。この告別式にマチルドが参加し、ヴェルレーヌの生活のひびきを人々から聞き、それが後の離婚確定後の交渉にいろいろと支障を招いたことをブチ・フィスは細かに報告している。さらに死神はかれの周辺を襲い、二月には伯母

のローズが、三月にはあのエリザの兄弟ヴィクトール・モンコンブルが相ついで世を去った。何がしかの遺産めいたものもあつたが、それらはすべて借金の返済に消えて行くしかなかった。

一方、かれの身体はアルコールのせいもあつて、ますます悪化し、七月にはついにトゥノン病院に収容されることとなつた。もつとも、ここは大部屋ではあつたが静かで清潔で十分な世話も受けることができた。九月はじめにはかなり恢復し、退院の運びとなつたが、これはもう一度地獄へ戻ることにほかならなかつた。再び、サン＝フランソワの生活が始まることとなる。これ以後、かれの死に到るおおよそ一〇年は病院と裏街暮らしの果てしない繰り返しが続く。これはニコルソンも言うように、「二つの時期というよりは二つの範疇に分割される」ことであつた。「病院で過ごした何ヶ月かがあり、ラテン区で過ごした何ヶ月かがあつた——これらを幕間とかれは呼んだが——、後者の方が事件にみちみちていたが、前者はおそらくより多くの興味を与えるだろう」と言つて、ニコルソンは先ず病院生活を語ろうとしたが、ここでは外部の生活に少し目を向けてみることにしよう。少し話は前後するが、一八八六年の春、ヴェルレーヌは若きダンディ、フレデリック・オーギュスト・カザルスと知

り会つた。まだ二一才であつたが、シャンソンとデッサンと詩の世界では才能の閃きを示し、上品とはいえないが濃い眉毛の下にいきいきとした目を持つ魅力的な若者であつた。一八三〇年代風という服装は「やさしい道化役者」というにふさわしかつた。折りしも若者たちの間に流行していた「頽唐志向」^{デカテイスム}はカザルスをも捲き込み、名前をわざわざA. des Caden SALSと書くほどの打ち込みようであつたという。このカザルスとの交際の結果、ヴェルレーヌは多くの自画像を含むデッサンをわれわれに残すことになり、また当時の文壇とのつながりを



カザルス

辛うじて保つことができたのであった。

ここでやはりプチ・フィスを借りてデカディスムを少し解説しておく、かれらは「頹廢」という新聞を発行し、

われわれは〈帝国〉の末期の頹廢だ

と宣告した。これは実はヴェルレーヌの

私は頹廢の末期の〈帝国〉だ。(「昔と今」「哀しみ」)

をもじったもので、どちらかと言えば世紀末的で病的という印象が強かった「デカダン」という形容詞に全く新しい、未開の倫理、汚されていない哲学を含んだ意味を与えようという意図を持っていた。それは反俗・反ブルジョワの旗印であり、「ミュージズたちの衰弱と溶解」をさらけ出すことで社会の解体を促進しようとするものであった。アナトール・パジュが主幹となり、モリス・



ヴェルレーヌによる
カザルス

デュ・プレッシーが副編集長、メンバーとしては、パテルヌ・ベリション、ロラン・タイヤード、ラシルド(女性)、ヴェルレーヌと親しかつた)などがいた。すでにふれたようにヴェルレーヌはこれらの傾向に常に接触を保ちながら、徐々に反対の姿勢を示すことになる。

ヴェルレーヌがトウノンから退院した九月には「フィガロ」の付録として、ジャン・モレアスの「象徴主義宣言」が発表され(二八日)、さらに一〇月、ギユスターブ・カーンの主宰する雑誌「象徴派」が発刊された。これはデカディスムの狂熱が、芸術的に昇華され、新しいフランスの詩法と理念とがより沈潜して考えられようとしたことを意味している。「世紀末」は大きな激動を繰り返しながら、着実にその歩を進めていたのだ。ヴェルレーヌもまた無意識ではあっても、かれなりに精一杯この時代の流れに従っていたのであろうか。この年一〇月一〇日、リュ・ジュシユのデカディスムの大きな会合にルイズ・ミシエルが参加したというが、ルイズ・ミシエルをたたえてと傍題したバラードを作ったヴェルレーヌもまたこの会に出席し、あのパリ・コンミュンヌと自らの青春を快く回想したのであろうか。

かの女は好きなのだ、激しく飾り気ない「貧乏人」が

それとも内気なのか、かの女は「貧乏人」のための白いパンになる熟れた小麦を刈る鎌だ

そして聖女セシル、また声はしわがれていても

ほっそりした「貧乏人」の女神ミューズ

この素朴でしかし頑固なものの守護神

ルイズ・ミシエルはほんとうにすばらしい

反歌

女同士よ あなたの福音書のために

人々は死ぬとも悔いぬのです、それは「榮譽」です

ほんとうに、

タクシルやバジールらの食わせものは問題ではなく

ルイズ・ミシエルはほんとうにすばらしい！

4

すでに述べたトウノン病院での二ヶ月は、ヴェルレーヌ自身も名付けたように入院生活の「アフランテイサージユ 見習」期間

であった。ニコルソンのいう「病院の範疇」に属する時期の中心は八六年一月五日、かれの運び込まれたデイド街にあるブルーセ病院である。それは樅の木と煉瓦で作られたアメリカの金鉱さがしのキャンプを思わせる建物で、どこことなく屠殺場に似ており、内部はメソジスト

の教会風にしつらえられていた。窓は環状鉄道に沿った花造りの庭に面し、眠れぬ夜は列車の汽笛がよく聞こえた。医師も看護人も先ずは申し分ないが、いささか猜疑心があり、自惚れの傾向があるのが難であった。「我が病院の記」(二八九一年刊)によれば、それでも病院は概して悪い場所ではなく、「幕間」には懐かしさと呼び起こすものであった。静かで簡素で平和で「結局、私は



ブルーセ病院

病院の方が好きなのだ」と自ら告白している。——この病院に入ってしばらくしてヴェルレーヌはマチルドが再婚し、ベルギー人デルポルトの妻となったことを知る。

この衝撃をいくつかの詩で表現しているが、これは後ほど作品の紹介の所で触れることにする。同時に息子のジョルジュへの思いも急速にふくれ上がるが、これも詩集『愛』の解説の所で改めて問題にしたい。——

若い崇拜者たちのブルーセ参りがまた始まった。一、二の例外を除いては、周囲の人々の眼は「詩人ヴェルレーヌ」を認め、温かい色合いを帯びていたようである。

入院生活は順調であった。医師たちはかれの病状を調べ、いろいろな治療を試みたが大体において効果はなかった。こうなればいくら望んでもブルーセが無期限にこうした病人を留めておくことはなかった。年を越した八七年三月、恐れていた期限切れがやって来た。戻って行くのはクール・サンフランソワしかなかった。しかし、ミディ・ホテルに戻ったかどうかは定かではない。精密なプチ・フィスの調査でもこの時期は「完全に暗黒の幕間」となっている。ただはつきりしているのは、ヴァニエラの世話によって今度はポール・ロワイヤルのコシャン病院を紹介されたことである。天井の高いこの病院は田舎風の建物ではあるが静かな所だった。

「少なくとも人々から離れて平和だ、苦痛も収まっている。死の観念、人々も自分自身も死んでしまえという思いは、エーテルと石炭酸の匂いの中に発散して行く。血潮はずっと平静に打ち、頭脳は新しく理性を取り戻し、手はいつもそうであったように善良に平和になっっている。」（『我が病院の記』）

しかし、「時は春、小鳥も鳴いている」と穏やかな心をもたらしたこの生活も一月で終わり、院長の紹介でヴァンセンヌ療養所が新しい休養地となった。サンモーリスにあるこの療養所はナポレオン三世の命によって作られたもので、広々としており、四つの庭と芝地があり、兵營のような長い廊下で部屋がつながっていた。規則も軍隊風で患者も青い制服を着け、羅紗の帽子をかぶらねばならなかった。無料では二週間しか留まれないここにヴェルレーヌは七月までいたというのだから、おそらく友人たちの援助があつたのだろう。そして一ヶ月後トウノンに移り、また、八月九日にはかれは再びヴァンセンヌに戻っている。

「八月だ、雨の多い八月だ。去年来た時は美しい春の月だった。……植込みの木々は黄ばんで、もう風が枯れ葉を吹き散らしている……退屈だ、図書館の本はみ



ブータンとヴェルレーヌ

んな読んだ。その叫び声が聞こえて来る狂人・狂女の病舎に沿った小さな林の木は一つ一つ覚えてしまった。真昼に聞くあの叫びは何という叫びだろう」

(「我が病院の記」)

かなり絶望的な口調が読み取れる。それでもここを出る九月の記録

「今や身投入だ。芦の繁みの中のもがき、ほとんど消滅、このマルヌの河に半ば埋没・半ば溺死、真つ暗といえる悲惨さ」(令前)

に比べれば、病院の方がやっぱり「少しはまし」なのだ。またまたヴァニエの好意で、かれはサン・ミシエル広場に近いラ・アルプ街のホテル、ド・ラ・アルプに部屋をとった。脚は相変わらず悪く、心臓もかなり病んで

いた。それに乏しい財布では生きる望みすら失われそうであった。友人たちの暖かい手にも目をそむけ、アプサントに憂いを忘れる毎日であった——驚くべきことに、こんな時ですら女性への憧憬は消えることなく、フィロメヌ・ブーダンとの出会いを後に「悲歌」の中でかれは報告している——しかし、幸いなことに九月の半ば過ぎにはブルースへの入院許可がかれのもとに届けられた。「帰って来た放蕩息子」のようにみんな迎えてくれたとヴェルレーヌは報告している。ここでかれは半年の静謐を得ることになる。そして、八八年三月、かれが再びこの病院を去るその日に、ヴァニエはかれの詩集「愛」を刊行した。

(今回は時間の都合でここで擱筆せざるを得ない「愛」の分析と、この後さらに続く入・退院の繰り返し、詩集「平行して」「幸福」の刊行などについては次回にふれることにしたい。)

(やまむらよしみ・文学部教員)



カザルスのデッサン

日本中国ことばの来往ゆきぎ

その32

芝田稔

「留学」に巣くう「文匪」たち

中国青年の日本留学熱が高まっているが、その潮流をますます加熱させ、それを利用して金儲けに走る「文匪」ウエンフェイ文化人面をした盗賊」が横行している。

周知のように去る一月、法務省は有名私立大学の名を冠した「日本語学校」等二三校（東京二〇、神戸一、埼玉一、栃木一）に対し「不資格」の烙印を押した。これらの「学校」の所業に業を煮やしたからであるが、この処分によって、不資格校に在籍する留学生五千余名の救済問題が焦眉の急となったほか、すでに上海で募集し、

入学金まで支払ったという三万五千人もの青年たちが、日本駐上海総領事館でビザの発給待ちだと伝えている。上海からの日本報道機関の説明によると、その中には「日本語学校」に留学するため二〇万円から三〇万円もの「入学金」を払い込み、すでにパスポートを取得、入国ビザ待ちの青年も多数にのぼる。しかもこれらの青年はすべて私費留学希望者で、彼らの経済的負担を考えると大変なことである。試みに二〇万円の「入学金」を例にとってみよう。

上海での彼ら青年たちの月収は、平均百元（一元は約三三元）といわれているので、日本の二〇万円は彼らの

六〇ヶ月分以上の金額に当り、それも飲まず食わずの計算である。

中国の青年が何故にこんななまでに私財を投じて日本留学を志望するのであるか。上海での調査によると、六年には上海から日本へ私費留学した青年が二千余人であったのが、八七年には七千人、八八年は二万五千人にも達している。だが、その大半が「留学という名の出稼ぎ」であった、といわれている。しかもその勧誘文句には「就学ビザで日本へ行けば週に二〇時間のアルバイトができる」とか「日給五千円から一万円、二年で二百万円は残る」等と「オイシイ」話ばかりである。筆者も四年前北京で、ある昔の知人からそれに近い話を聞いたことがある。うまい話には必ず落とし穴があるので、今も昔も変わりはない。

古い話で恐縮だが、頃は明治三四（一九〇一）年、ある日本人が北京で、日本留学に六人の清国青年を勧誘した。各人に「八百金」を用意させ、荷物をそろえさせ、自分は一等、青年らは三等船室。門司で一泊、京都で数日、観光宿泊の費用は六人で分担させられ、東京に着いた時には残金「二百金」になっていた。その日本人は彼ら六人を下宿の一室に詰め込み「金と荷物」を持ってドロンした、という記事が『新民叢報』（明治三五年四月

八日）第五号に掲載されている。そして第一六号で梁啓超は「留学生の責任とその箴言」と題して大要次のように、留学生を励ましている。

将来の中国を担う者は留学生である。官吏社会の腐敗、細民社会の無識、八股家社会の頑迷、何れも氣息奄々としている。……留学生こそ文明の教育を受け、他国の良風に染まり、加うるに愛国心、賦するに青年の血気と能力をもつ。故に留学生は中国の未来の主人公であり、未来の統帥者である。

故に留学生は第一に自覚、第二に大勢を知ること、第三に愛国心と政治思想を確立することである。



梁啓超が留日学生に対して、こんな檄を飛ばしてから八八年にもなる。その間中国は二転三転と試行錯誤、新しい脱皮を続けているが、この檄は今日の中国青年に贈つてもそれほど筋違いではあるまい。と同時に日本に新しい知識と技術を求めて来る青年をうまい口車に乗せて彼らに道を誤らせている日本の、また中国の「文匪」に對し活躍の場を与えてはならない、と思うのである。

日本中国 卒業式スケッチ

始まりがあれば必ず終わりがある。今胸を躍らせながら校門をくぐった新入生諸君も、四年後の三月には学士の証書を手にして社会へ巣立って行くのである。

本学の卒業式が、中国の一教授に対してどのような印象を与えていたのか？『隨筆』（八八年第三号）所載の潘旭瀾『啓航前―船出前』からその要点を紹介することにしよう。

私は一九五〇年代に大学を卒業し、そのまま母校に居残り三〇余年來教師をしているが、大学の卒業式について何一つ印象に残っていない。だから大阪のある有名な大学の卒業式に招かれた時には、何のためらいもなく予定していた旅行計画を変更した。知り尽くしているはずの卒業式のことだが、日本では

どんな風に行われるのか、多少好奇心もあつたようである。まず目についたのは、平生とは違う卒業生の姿であつた。

校門から体育館へ通じる道筋は、男女学生や父兄があふれ、上海あたりの縁日か、国家的な大イベントに繰り出すあの華やかな雰囲気か、漲っている。男子学生はピンとしたスーツに目を引くネクタイ、皮靴はピカピカ。女子学生は華麗な模様入りの和服（一着数十万円から百万円もするそうだ）に身を包み、髪には名も知れぬ生花を挿している。教師や父母らもそれぞれ余所行き姿である。

体育館の外にはブラスバンドや舞蹈、武術、合唱隊が整然と居並び、拍手、笑い声、歌声、楽隊の演奏など、ここあそこに起こり、祝賀気分を盛り上げている。「カチャ・カチャ」引つ切りなしにカメラの音。だがいくらフィルムを使つても、この雰囲気を取めることはできそうにない。

次は式場である。

ブラスバンドの伴奏で学歌の斉唱が始まった。学長、教授、学生らは重々しく、感情を込めて歌っているし、父兄や来客も手にした楽譜を追いつつ口ずさむ。歌声のリズムは怒涛のように、私の心におつ

つまり、心を洗い流して行く。音響、雰囲気、情緒、式場全体が一つの張り詰めた気球となって、静々と大空に舞い上がって行くかのようなだった。その時、私は一種の「虚脱感」に襲れた。——私の母校であり私が勤めている大学は、歴史も古く国際的な名声にかけては、この日本の大学にも劣らないのに。私は三〇数年来まだ一度も校歌を歌ったことがなかったからである。

次いで中国との違いを思い出しつつ場内を描写する。

壇上には「中国のように」物々しい議長団の難壇などは無い。演台の後方に斜めに挿した校旗が一流、その反対側には松に生花をあしらった大きな花瓶、その後方には金屏風だけ。学長は燕尾服、演台に立つと祝辞。ほとんど原稿を見ない。感情を込め、抑揚のある語調で三〇分余り、卒業生に対し社会のため・自己のため素晴らしい未来を創造するよう激励した。

「アー」とか「エー」とかはなく、また「中国お箱の」「八股パーク」、内容の空虚な形式的な言辞や態度をいう」式の祝辞ではない。卒業生は真面目に聞き入っていた。

つづいて卒業生代表の「答辞」である。中央階段

の最上段に立った代表は、演台を隔てて学長に対面し、感謝の意を表し、大学の伝統をさらに発揚する決意を述べた。散文詩を朗読しているようだ。緊張のせいであろうか、テンポも速い。終わると朗読した原稿をたたみ、丁寧に学長に捧げる。その瞬間、これは大学と卒業生との感情を結びつけるゴムのりの役目を果たしているように感じられた。

それだけではない、さらに教授と卒業生を結びつける光景を見たのである。卒業式が終わってクラスの教室に入ってからである。

中国文学科ではまもなく定年退職するという老教授が、真っ白なネクタイ（中国では真っ赤なもの）という正装で、新学士に対し卒業証書を授ける光栄ある任務を遂行した。何もかも簡潔を尊ぶ日本人であるにもかかわらず、この時ばかりは卒業生全員に、一人一人の名前を呼び、一々証書を朗読して手渡すのであった。このほかにも教員免許証や表装の疑った一万円もする記念アルバム等が配布されたが、その時の態度の鄭重なこと、真面目なこと。ここで私は私の卒業式？を想い出した。

では、中国の大学で体験した教授の卒業式を聞いてみよう。

卒業が近づくと、父母がどんな縁談を持ち込んで来るのか、いらいらしている年頃の娘のような気持ちになってくる。いよいよその時がくると、時間前だというのに教室には全員がそろっている。やがて主任教授が名簿を持って入ってくる。さて、読み上げるのだが、すらすらいかないのは、今名簿をもらったばかりで、目を通す暇もなかったためであろう。時には一〇数秒も停顿して、やっと就職先が判明する。それでも三〇分位のうちに五〇数人の運命が決定されてしまうのである。

終わると解散、みんな宿舍へ戻ってくる。そして印鑑だの、移転届だの、荷物の運搬だの、みんな思い思いにガヤガヤ、ブツブツ。だが、悄然とだまりこくっている者もいる。やがて各人が学校を出て行く手続を済ました時、卒業証書が渡された。私たちの卒業式は、就職先が発表された、あの教室に集まった時だったのである。

第三部は「謝恩会」である。この光景を観察した教授は教師と学生とのあり方について、何かを発見したように受け取れるのである。

ホテルに入ると、もう卒業生たちが待ち構えていてくれた。女子学生は和服を夜会服や洋服に着替え



ており、大変なりラックス振りである。卒業生代表と教授の短い挨拶が終わり、乾杯、拍手につづいて宴が始まる。一時飲み且つ食い、談笑した後歌唱、踊り、少林寺拳法まで、卒業生の余興で賑わう。

こうした師弟間の和やかな雰囲気けいに浸っていると、作者は自分が曾て味わった師弟間の険げしさを想起せずにはおられなかったらしい。

私が大学を卒業した頃、師弟の間には不正常な関係がふくらみつつあった。旧社会に育った教師、知識分子はプチブルであり、彼らの世界観はブルジョアジーに属する。新社会に育った知識分子である学

生は、その立場から見て、教師は自分たちの仲間ではない。彼らを改造し、利用すれば良いのである。

教師はある日突然「反革命分子」にされてしまい、次が逮捕・投獄であり、平素教授と親しくしていた学生も連座の憂き目を見る。だから教師に対して尊敬したり、感謝・感激の情を起せば、それこそ人に合わせる顔を無くすことになってしまうのである。

だから中国では当時、教師に対し「謝恩」なんて考えは微塵もなかった。就職にしても「統一分配」(統一的就職を割り当てること)制度の結果、個々の活気が失われる傾向が目立ってきたようである。

日本には、学生の就職について「統一分配」という制度がない。だから「泣き言」が聞かれない。それはみんなが合理的に、思い通りに就職できたということの証明ではない。成績も能力もそれほどなくとも、「引き」によって他人が羨むような就職にありついた学生もいる。ある女子学生は中国語が堪能で、クラスでは特に優れていたし、私の知る限りでは院生の誰よりも上手だった。だが希望する職につけなかつたらしい。彼女は今のところ働け、機会があれば自分の目指す仕事につきたい、たとえ

俸給が下がっても。でなければ四年間打ち込んだ努力が無駄になってしまうという。彼女のようになんかの人生の価値を認識し追求している女性は少ない。自らの道を開拓していく可能性をもっている彼女には、憂いに沈んだ表情はなく生き生きと生きている。そこへくると、中国ではどこに分配されても、それが一つの「固定資産」であるから、新しく道を開くなんてことはあり得ない。だから歳月が経つにつれて、すっかり活気を失ってしまうのである。

以上潘教授の印象を紹介したのであるが、この文章は当然のことながら、中国の知識層読者を対象として書かれたものである。ただ関西大学を巣立って行った先輩たちが、中国のインテリに与えた印象を、新入生のみならず伝えたかったからである。

因みに潘旭瀾氏は上海の復旦大学中文系の教授(現代中国文学・文学論)で一九八〇年一〇月から翌年三月末まで、交換教授として来学、本学中国文学科で現代中国文学作品の傾向等につき講義された。なお文中に出てくる「ある女子学生」は、初志を貫き八五年度文部省の派遣留学生として目下北京師範大学で北京語の研鑽に励んでいる。

(しばたみのる・文学部非常勤講師)

— 連載 —

懺悔と抑圧

—— 在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート Ⅲ

梁 永厚

戦後初期の日本の支配層は、いじめっ子が懺悔をしたといながらいじめを続けるという陰湿な図式で、民族排外と抑圧策をとり、阪神朝鮮人教育事件のような大事件を誘発させた。そうした民族排外と抑圧を許した思想的背景と抑圧の手法をみていこうと思う。

終戦直後に政権を担当した東久邇首相は、同年の八月二五日、記者会見をして「一億総懺悔論」を唱導した。懺悔とは過去の罪悪を悟って悔いることであり、主情的には反省、客観的には行動をとまなうものである。したがって、侵略戦争を起し敗れたことにたいし、一億の国民を擧げて懺悔しようと唱導することは、当然、被侵略

民族への明確な責任を前提にしなければならないことであつた。

しかし、「一億総懺悔論」は、天皇の意志による「終戦」説（昭和天皇の死去に際しても大きくキャンペーンされた）とともに、軍事力の不足、科学のたちおくれ、行政の失敗、国民道議の低下などを敗戦の原因としてあげ、その責任を国民に転嫁することで、侵略戦争の客観的事実をおいかくそうとする、戦後最初の支配イデオロギイから打ちだされたもので、被侵略民族への責任は言及すらされなかつた。

そして、日本人総体の思想状況もまた、戦争の敗因か



らさかのほつて、開戦の原因を追求し、その責任を支配層にむけて問うまでには至っていなかった。ただ敗因を問うにとどまるといふ認識の程度で、被侵略民族にたいする責任を明らかにしていこう、という歴史意識は稀薄といえた。こうした思想状況は、支配層の民族排外主義

的な在日朝鮮人抑圧政策の遂行、つまり、懺悔を唱導しながら民族抑圧をするという、不合理的な政策を罷り通らせたといえよう。

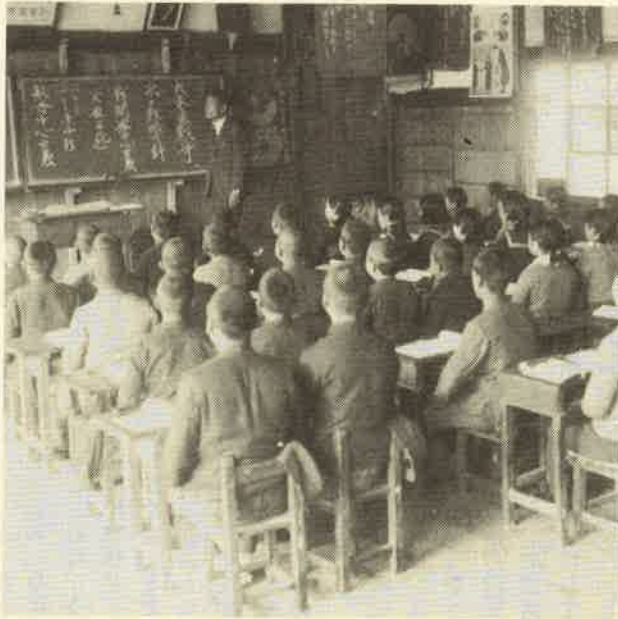
さて、「植民主義教育の実相」（本誌第八六号）で触れたように、日本帝国主義の虜とされていた朝鮮の子どもは、学校に入学するチャンスに恵まれたとしても、朝鮮人としての自分を選ぶことを否定され、もつぱら「皇国臣民」への変性を迫る教育をうけ、つまるところは、支配者の要求としてしか存在しない、非人格的で物体化した人間形成を強いられた。それとあらわれかたはことなるとしても、日本の子どももまた、日本帝国主義にとらわれた国民教育によって、他民族を抑圧し支配する民族としての思想と感性をうえつけられ、人間性を失った植民主義者に育てあげられていた。何れも、日本帝国主義の侵略と支配の実現に奉仕をさせられたのである。

他民族への侵略と支配は、支配する側の国民のなかに、被支配民族にたいする優越と侮蔑の意識をうえつけ、なお、それを合理化し励ますような歴史認識を抱かせなければ成立しうるものではない。したがって、戦前の国民教育は、アジアの諸民族を侵略と支配の対象として認識させる、大国主義思想または「脱亜」思想を基底にしていたといえる。そして、実際の侵略と支配の進展にとり

ない教育内容を当該民族への支配観念を強める内容に、改編をかさねてきた。

その結果、日本の子どもたちは、朝鮮をはじめアジア諸民族の歴史と社会が、停滞的であちおくれ、自立の能力を欠くという認識をさせられた。そうした認識をさせるために、アジアの諸民族の自主独立運動についての知識を教えず、たとえ教えたとしても、民族の自主性に乏しいということを示明するかたちで、歪曲した知識のみを教えられた。なお、反面においては、アジア唯一の先進国は日本であると認識させられ、日本を頂点とする「大東亜共栄圏」の建設は、日本の使命であるとする歴史意識をうえつけられた。こうして、日本の子どもたちは、大東主義思想にもとづくアジア認識を抱くようになり、また、アジアの支配者であるという観念を定着させていたのである。

戦前の国民教育のなかで、日本の子どもに支配者の観念を形成させる教育は、主として朝鮮を題材として進められたといえる。一九一〇（明治四三）年の日韓併合からすぐに、朝鮮を「日本帝国の領土」とする教育内容および教科書の修正を行い、公然と先進・富強の日本、後進・貧困なる朝鮮という、差別的構図によって、日本の朝鮮統治は、日本のためにも、朝鮮のためにも、よいの



だという認識を一貫してうえつけてきた。

そうした認識の「正当性」を、戦前の史学界の実力者の一人は、「(朝鮮史)を学んで得るところのものには、朝鮮は政治的独立力の弱いところである。…その朝鮮は、内地と融合し同化することが最も正しく且幸福である。

『書評』編集 STAFF募集!!



内鮮融和は相互に必要なである。我が内鮮関係史は畢竟この必要を教えるものにほかならない」(中村孝也著『国史教育の改善』 昭和十一年刊 一二四頁)と提示している。

なお、支配者本位の朝鮮認識をさせる教育と並行して、知識の上だけでなく生活実感的に支配者にふさわしい感性をうえつけることを怠らなかつた。それは、おける朝鮮における三・一独立運動(一九一九年)を歪曲し、「日本の善政」をうけいれない不逞朝鮮人の暴動であると伝え、日本の子ども心のなかに朝鮮人への恐怖感を抱かせ、また、関東大震災時には、在日朝鮮人への流言

をながして、朝鮮人虐殺を煽ったことなど、あげれば数多い。

とくに、関東大震災のパニック状況のなかでは、朝鮮人を「恐シイモノ、憎イモノ、殺シテモヨイモノ」という朝鮮人観が、多くの日本人の意識のなかに形成された。たとえば震災の一年後に行われた学童の意識調査(東京市役所、万朝報社共編『一時五八分』大正一三年刊所収)には、東京の下谷高等小学校の震災罹災生続が「一番恐シカッタコト」と感じた事項として、六〇%以上の生徒が、「鮮人騒ギ」をあげている。

調査結果についての教師の概括は、要約をすると「怖

『書評』は私たちによる文化形成のための印刷メディアです。あなたも『書評』を創ってみませんか。

「雑誌」に興味のある方、思想・文化活動をやりたい方は、『書評』編集をはじめ、講演会や映画上映のSTAFFになってみましょう。

私たちは、いつでもあなたをお待ちしています。

★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線 4821)



イ、恐シイ、憎イ」の項目中、多い人は朝鮮人にたいする感じであり、「爆弾ヲ投ゲテ怖イ」「井戸ニ毒ヲイレラレテ困ツタ」という流言を信じての恐怖感であり、朝鮮人にたいする不安と反感から、朝鮮人虐殺をした軍人、自警団員の活動を「勇マシク感ジタ」児童、生徒が多数であり、虐殺の場面や死骸を見て、「痛快デアッタ」、自分たちも大人だったら「沢山ノ朝鮮人ヲ殺シデアロウ」という「憎悪、敵対ニ満チタ感情が伺エル」とある。

つまるところ、日本の子どもたちは、ことあるごとに民族的偏見をうえつけられ、朝鮮の子どもとの人間関係を歪めるモラルの退廃、人間性の腐敗を促がされていたのである。なお、そうした感性を身につけることによって、人民・民衆の利益に副った、ものの見方、考え方がそこなわれ、自らを日本帝国主義の枷から解放していく思想、アジアの被抑圧諸民族との友好・連帯の思想を育みえなかつたのではないかといえる。

こうした思想状況のなかで敗戦を迎え、戦後の展開が始まるのである。

日本の植民地支配から解放された朝鮮民族は、天皇制・国体護持という日本の支配層のエゴによって、南北分断の民族的苦難を負った戦後を迎えた。日本の支配者は、七月二六日に発せられたポツダム宣言の受諾に際し

て、天皇制即国体護持という国民不在な対連合国外交渉のために、受諾の決定を遅らせ、結果的に広島・長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦を招いた。ソ連軍の参戦がなければ、ソ連軍の朝鮮上陸がなく、終戦後、日本軍の武装解除の米ソ分担ライン・北緯三八度線は引かれなかつた。朝鮮半島の南北分断は、天皇制・国体護持という日本の支配者層のエゴが、その契機となったというのが歴史的事実なのである。

戦後、「天皇および日本政府の国を統治する権限は、連合国軍最高司令官に従属するものとされ、日本政府の上に、連合国軍最高司令部・GHQが座るようになり、日本政府の在日朝鮮人にたいする権限は不明確になった。在日朝鮮人は、民族差別賃金のために生活水準が低く、とくに日本の戦時経済に結びつけられていたので、終戦とともに経済基盤を奪われ、生活を維持する手段にこと欠いた。そうした実状から、GHQおよび日本当局に帰国と生活問題を中心とした諸般の要求をするようになった。また、かれらは、自分たちは解放民族であり、日本人は敗戦国民であるとの単純すぎる考えにもとづいた行動をとった。

占領当初のGHQは、在日朝鮮人問題の存在をあまり認識しておらず、かれらの問題を主管する部署も設けて



短評募集!!



短評を書いてみませんか?

最近一年間に発行された本の中で、自分がこればぜひ人にも勧めたい、または、強く印象づけられた本の短評を原稿用紙(四百字詰二、三枚に)。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 千565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線 4821)

いなかった。しかし、日本の法律による圧迫と差別に苦しめられてきた、在日朝鮮人の地位をいくらか引きあげて処遇しようとする同情的傾向があった。したがって、GHQの初期の指令のなかには、会社に雇用されている朝鮮人にたいする賃金差別の禁止、雇用の機会の保障、警察上の差別的取扱の禁止などが含まれた。

こうしたGHQの指令や実際の処理は、天皇制存続の見通をつかんだ日本の支配層からすると、日本人以上の特権的地位を朝鮮人に与えるかのように思われ、認め難いことであった。そこで日本の支配層は、「一億懺悔論」という支配イデオロギー策でもって、国民の意識を擲め

るとともに、戦前の大国主義を反転させた民族排外主義へと国民を導入しながら、GHQにたいしては、在日朝鮮人を規制する指令を出させるよう仕向けたのである。

その手法については、占領行政に携わり、のちにハーバード大学の教授となったE・W・ワグナーの『日本における朝鮮少数民族・一九〇四——一九五〇』に、「日本政府は極めて効果的に朝鮮人にやりかえしをした。あるときは、総司令部を出し抜き、または回避し、思慮深い高圧的戦術に訴えることにより、直接朝鮮人に対し圧迫を加えた。また、あるときは主要な武器として宣伝を諷刺が用いられ、その攻撃は日本国民が、または占領機

関を間においた間接的なものであった。」と前置きしながら詳細にとりあげている。

そのいくつかを要約して引いてみよう。

● 総司令部は引揚船の不満足な状態、施設、給与の不適正を是正するよう、くりかえし指令をだしたが、日本政府はそれをおかし、朝鮮人を顧りみず、朝鮮人を犠牲にしながら、日本人引揚者にはできるだけ好遇をした。

● 朝鮮人炭鉱夫にたいし、朝鮮への送金を許すとの総司令部の規定については知らされなかった。

● 日本の官憲は（一部不心得な）朝鮮人の不法活動の事実を拡大して、マスコミのたすけを得ながら猛烈な排外宣伝を行った。排外宣伝は朝鮮人のヤミ市活動を中心に展げられた。国会においても、故意に民族的憎悪をかきたてようと、「降伏のときまで、日本人として日本に存在してきた台湾人、朝鮮人が、あたかも戦勝国民のように威張っているのを、われわれは傍観黙視しておれない：云云」（一九四六、八、六、進歩党所属権態云郎代議士演説）というような中傷演説が後続した。

● 占領軍にたいして、朝鮮人なるものが、つまらないものであり、犯罪性があり、信用しがたいものであることを思いこませようとした。たとえば、占領軍の法務担当官が一刑務所を視察するとしたとき、朝鮮人だけが収

監されているようにみせるため、日本人受刑者を仮出所させ、朝鮮人の脅威をみせかけ、朝鮮人にたいする管理上の強大な権力付与を得ようとした、等々である。

以上のような手だてをとりながら、日本の支配層が欲した権限は、朝鮮人にたいして日本人として処遇することであった。一九四五（昭和二〇）年一月一日、ワシントンの極東委員会より発せられた「日本占領及び管理のための連合軍最高司令官にたいする降伏後における基本的指令」には、「朝鮮人を解放人民として処遇すべきである」、「かれらは、いまもおひきつづき日本国民であるから、必要な場合には敵国人として処遇されてよい」という相矛盾する法的地位が示めされた。日本の支配層は、この指令のすぐあとに、在日朝鮮人の法的地位は後者とすするGHQの保障をとりつけるためワグナーがあげたような策を弄し、奏効を図ったのである。

そうした結果、在日朝鮮人の法的地位が日本国民として明確にされ、戦後初期の抑圧と差別をはじめたのである。それは、戦前とおなじく日本の公私の機関が一体となつて、在日朝鮮人の人権を抑え、無権利の状態へと押しこむかたちで現われ、教育においては、「皇民化教育」の延長ともいえる同化教育の強制となつた。

■短評■ 外国人労働者

手塚和彰



昨春秋、大阪の外国人登録法に反
対する市民グループの集会の基調報
告で、「外国人労働者問題を論じるに
あたり、かつての経験としての第二
次世界大戦前に敗戦直後の外国人労
働者問題である在日朝鮮人・中国人
問題が忘れ去られている」この指摘
があった。「国際化」が叫ばれ、「働
く外国人」について、財界が「提言」
を発表し入管法の「改正」が目論ま

れている昨今、外国人労働者問題に
関しての出版物や論議も活発になっ
てきたが、先の指摘は重要な問題提
起であろう。過酷な条件下で働く外
国人労働者の姿に自からや父母の姿
を重ね合わせる在日朝鮮・中国人は多
いという。外国人労働者問題に際し
ても、近代日本の最初の外国人労働
者であった朝鮮・中国人の歴史をし
っかり見つめ、そこから教訓化して
いく姿勢を持つ人々はまだまだ少数
であり、財界や政府に至っては逆に
歴史を消し去ろうとさえしている。

彼らの外国人労働者に対する政策の
基調は「いかにより合理的に外国人
労働者から収奪するか。」というこ
とであり、この間の「受入れ」構想
に関しても、日本に流入する外国人
労働者の実態と現行法規の矛盾があ
まりに歴然のため、今後は「合法的に
搾取する」という宣言に他ならない。

一方で、外国人労働者の人権を守

ろうという運動も徐々にそのネット
ワークを広げつつある。「非合法・
無権利」状態におかれた外国人労働
者の権利を合法化を実現させること
で最低限保障しようということの中
心としたこの運動も、(差別・選別
的にはあるが)一定「合法化」さ
せるなかで新しい局面へとおのずと
突入していくであろう。外国人労働
者の権利を守ることと外国人出稼ぎ
労働者がなぜ生み出されるのかとい
ったより本質的な問題が結合されて
いくに違いない。

「右手で殺しあるいは奪い、左手
で寛大そうに援助する」というので
は問題(ルーベン・アビト氏)と
いう通り、外国人労働者問題に対し
てそうならないような努力が求めら
れている。

【文献紹介】

『外国人労働者の合法化に向けて』

編集カラバオの会 発行新地平社

監獄は市民生活から切離された存在に思われやすいが国の政策から離れて存在するわけではなく私たちと根底で結びついている。

現在、監獄法・拘禁二法案（刑事施設法、監獄施設法）が弁護士協会や多くの市民団体の反対を押し切り国会で審議されるに至り、今また継続審議にうつろうとしている。

なぜ拘禁二法が問題なのだろう。

■短評■ 留置場女たちの告発

手塚千砂子編



その理由の1つにこの法案が「代用監獄」の合法化・永久化をねらったものであることがある。

「代用監獄」は文字通り留置場（警察管轄）を拘置所（法務省管轄）の「不足」を理由に代用するものであり、刑務所や拘置所などにある数多い共通の問題に加えた留置場自体の問題性を強めさせていくものであるのだ。

まず、共通の問題としては、法治外にさらされ、警察の留置場内や拘置所で看守による監視下のもと、統制をとるために暴力によつておどしたり、また、看守のほとんどが男性であるため、女性が暴行・強姦をうけるなどの人権上の問題がある。

また「代用監獄」という留置場そのものものでは、その存在自体が例外規定であり、成案当時、「失わせてゆく」とされていたもので現在の拘禁二法案は逆行してゆくものだ。

そして、なにより、「代用監獄」

は警察の24時間取調べ体制にあり時間制限が拘置所と違ってないので被疑者は精神的においつめられ、いろいろ手段を使い自分を強要され、犯人に仕立てられることがおこっている。また、その後の自己維持にも「代用監獄」は警察の監視下にある意味から有効なシステムとなる。

裁判で自己撤回し、無罪を勝ち取る場合もあるが、冤罪を生み出し、警察内部のことで、証拠がつかみにくく、有罪になる場合も当然ある。

いずれにせよ、「罪をにくんで人をにくまず」とあるが、まさに罪と人権は別であらねばならない。

拘禁二法案は、「代用監獄」による蹂躞権の温床をさらに強化し、防声具の使用を明文化することで拷問・リンチを合法化しようとしている。

これは私たちの人権に対する姿勢であると考えさせられる。

◎86号 (1月号) <1989年>

▶講演録 (1988. 4. 13)

教育再編の生体解剖
—「管理教育をけつとばせ」

- 基調
- PART① 尾崎ムゲン
- PART② 鎌田 慧

▶研究ノート

「周作人日記」にみえる鄭振鐸… 倉橋 幸彦

▶連載

—在日韓国・朝鮮人の
教育問題ノートⅡ—

- 植民地教育の実相…………… 梁 永厚
- 研究余滴 ヴェルレーヌ(11)
- 「今と昔」—夢よ再び…………… 山村 嘉己
- ロマン主義文学論序説(7)
- 小説のなかの異境…………… 池田 浩士
- 日本中国ことばの来往(31)…………… 芝田 稔

◎85号 (10月号) <1988年>

▶岩波新書特集—岩波新書から戦後を問う
心に残るこの一冊

- 書評編集委員会より
- 忘れられた思想家—安藤昌益のこと
〈ハーバート・ノーマン著〉石尾 芳久
- 日本の地方自治〈辻清明著〉
…………… 市川 訓敏
- アリストテレスとアメリカ・
インディアン
〈ルイス・ハンケ(佐々木昭夫著)〉
ルソー〈桑原武夫著〉…………… 上田 蒼志美
- 魔女狩り〈森島恒雄著〉…………… 小川 悟
- 東京大空襲〈早乙女勝元著〉… 小山 仁示
- 銃後の責務…………… 芝井 敬司
- 解放思想の人々〈大塚金之助著〉
…………… 松岡 保
- 資本論の世界〈内田義彦著〉… 若森 章孝

- 結核をなくすために〈松田 道雄著〉
…………… 木田 和雄
- 同時代のこと〈吉野源三郎著〉
…………… 三谷 真
- 数学の学び方 教え方〈遠山啓著〉
…………… 山本 登
- 知的生産の技術〈梅棹忠雄著〉兩宮 俊彦
- アユの話〈宮地伝三郎著〉… 佐々木土師二
- 子どもたちの太平洋戦争〈山中恒著〉
…………… 多湖 正紀
- 岩波新書アンケート結果報告

▶連載

日本中国ことばの来往(30)…………… 芝田 稔

▶寄稿

網野善彦著「異形の王権」について
…………… 石尾 芳久

◎84号 (6月号) <1988年>

▶寄稿

- イエーリング
- 「権利のための闘争」について 石尾 芳久
- 対南ア経済制裁をめぐる
- 「日本の問題」…………… 神野 明
- 「定住外国人関係法」制定運動を考える
…………… 李 英和

▶書評

闘った者の深さと美しさ
—「人間の運命」(ショーロフ作

米川正夫・漆原隆子訳 角川文庫)—
…………… 伊藤 明子

▶連載

- 戦後、民族教育の出自
- 在日韓国、朝鮮人の教育
問題ノートⅠ…………… 梁 永厚
- ロマン主義文学論序説(6)
- 小説のなかの異境…………… 池田 浩士
- 研究余滴 ヴェルレーヌ(10)
- ふたたび愛の狂乱に…………… 山村 嘉己

Part.1

テーマ

「大学を(自由)に生きるには?」

— 新しいクリエイター達へ —

日程 3月25日(土)・26日(日)
場所 京都・嵐山
講師 渡辺幸博(文)・市原靖久(法)
岡村達雄(文)

Part.2

テーマ

「(国際化)とは何か?」

— (国際国家)ニッポンを考える —

日程 4月8日(土)・9日(日)
場所 京都・伏見
講師 木田和雄(商)・大西正曹(社)
石田浩(経)・山村嘉己(文)

Part.3

テーマ

「大学で何ができるか?」

日程 4月22日(土)・23日(日)
場所 兵庫・神戸
講師 小川悟(文)・三谷真(商)
引原隆士(工)・野口太郎(工)

(順不同)

あなたも
参加して
みませんか

「とにかく何かをやらなくっちゃ!」と新鮮な気持ちでいる新入生の皆さん、組織部主催のセミナーに参加しませんか? 酒をくみかわし、先生方と、そして私達と一緒にテーマにそって話しているうちに、そこから新しい出会いが見つかるかもしれません。さあ、自ら、何かを始めてみましょう。

「新入生歓迎セミナー」のお知らせ

申込み要領

しめきり：先着30名(各回)

参加費用：2,500円(交通費・宿泊費・食費・資料代等含む)

申し込み・お問い合わせは生協本部3階組織部まで

TEL 06-387-9998(直通) 06-388-1121(内線4821)

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結講です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行（二五〇字）を一枚と計算します。
▼枚数は自由。（ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。）

▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内「書評」

編集委員会

☎ 387-9998（直通）

☎ 388-1121（内線4821）





編 集 後 記

新人生歓迎号（第87号）をお届けします。

今回は読書案内特集です。「読書という方法を通じて今後、私たちの「知」をいかに形成してゆくのか」について、関西大学教員の方々からのメッセージとして、入学後の読書のあり方、特に、世界観・価値観の形成に有効な読書（本や読書法）をご紹介します。

これまで、受験勉強において「ココが出る！」「ココが重要！」とポイントを押えた勉強が中心でした。しかし、そのような要領の良い受験技術養成が生み出すものは、「与えられたもの」を確実にこなす人間であり、一歩間違えば、「与えられる」内容が、どんなに理不尽なもの——人間になる要素を多くはらんでいます。「与えられた」ものについて、何の疑問も持たず、ただ管理されるがままの人間を生む一因はそこにあるといえましょう。自ら本を選び、読み広げていく、そしてそれを目的とせず、出来るだけ、読後の自己のあり方を共に考えられるような読書でありたいものです。

今回から、短評コーナーを設けました。一冊の本は、私たちにいろいろ問題を投げかけてきます。私たちは、それらの問題を本を通して「自らの意見」はどうなのかについて、とらえかえしてゆきましょう。そうして、批判的思考を深めてゆきましょう。

『書評』 1989年4月号 通巻87号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121〈内線4821〉or 387-9998)
頒 価 250円